藝苑漫筆 立極

67-532
1200501281761
7
532

始

文學博士 福井久藏撰輯 秘籍大名文庫 第四

藝苑漫筆 上

松平樂翁公

東京麹町 厚生閣版

昭和大学 図書

解題

福井久藏

こゝには樂翁公の建築・庭園・茶道・雅樂・繪畫に關する趣味に屬する數本を收め便宜上藝苑漫筆五種と題することゝした。中に建築に關する蒐裘小錄は一名を草のよすがといひ、家の向き方・屋根・廂・壁・障子・簾・杉戸・門・承塵・額・炬燵等より椅子・枕・机 硯・書燈・釜等の調度に至るまでの好みを錄したものである。

樂翁公は風雅の嗜深く、寛政中幕閣を退くや、その領國白川に赴き、城内三廓に東園西園北園を作る。後大沼の地を相し堤を築き南湖園を作る。また將軍家の允許を得、築地の一橋家の御園を得、これに手を加へて浴恩園を營む。また大塚の控邸に聚芳園を作り、花木を植る、晩年には深川に一小園を開いた。この設計に自家の好尚を托し、和漢の佳字を探りてその名どころに命名し、浴恩園に關しては夙く君恩を永く忘れない爲に一文を綴り、後文政六

年谷文晁をして浴恩園眞景一卷を描かせ、圖記一卷、同假名之記、同亭榭之寄題一卷、同序竝詩歌一卷、同扁額帖一卷、同碑之詩歌二卷を作られた。漢文の圖記は儒臣廣瀨典に撰文を命じ、題字は一橋羽林齊敦卿に請ひ、跋は柴野栗山に作らしめ、詩は尾藤二洲・古賀精里・菅茶山・劉煜・立原杏所・賴杏坪等天下知名の人々に、歌は松浦靜山公、鍋島雲叟公に囑し、亭榭の名に寄せて自らも歌をよみ、北村季文に詠ましめ、扁額は安樂院一品公通法親王、輪王寺一品公澄法親王、從三位中將齊匡卿以下當時の名流の筆跡を請ひ、假名の園記はみづから文を屬し、その書寫を堅田少將堀田正敦侯に囑した。この二つの園記は公のこの方面に於ける好尙を見るべきである。また松平不昧公の大崎名園を世子に請ひてこれを見、その記をも作られた。爰には浴恩園記を取つた。

公は茶道にも造詣する所が深かつた。寛政五年六月茶事掟一卷を誌し、同七年更に茶道訓一卷を著し、主客の交り、食膳の質素などに就きて說くところがあり、またその家に傳へた遠州流の傳說を錄し、後御用人青木佐五衞門の爲に樂亭茶談一卷を著して與へた。後これを

老の波と改めた。こゝに老の波を收め、樂亭茶道によりて補つた。公は音樂に關しては生父田安宗武卿の遺傳を受け、朝廷に行はれる雅樂を好み、當時一般武門の嗜みとして修めた謠曲は顧みなかつた。藩士にも雅樂を修めしめた。一とせの秋疝を患へて飯阪の溫泉に湯治に赴かれた。出發の前日望月の日三十人ばかりと詩歌の會を開き、餘興に雅樂を奏でさせられたことが退閑雜記に見えてゐる。

上略　和歌とからうたとは左り右りに列し皆兼題の歌出しはてゝ、探りてまた題をとりてよみたり。それより酒くみあふ頃をちかたにものゝ音すなり。かの西の庭にて集會亂聲するなり　その聲近うなりて聞けば向音聲に萬歲樂奏するなり。秋なればさもあるべき物の拍子よくとゝのひて感もありけり。いどゝ近うなるまゝに池を見侍れば二つの船こぎ來りぬ。さげみづらにゆひたる棹童舟こどに二人、五彩の棹もちたるさまかぶとに唐裝來して鼓うち管吹くけしきいふも更なり。舞人二人陸へあがりて一曲を舞ふ。はてゝ輪臺青海などと有りたるが青海ことにすぐれておかしかりける。

これが白川の城に於ける藩士の演奏である。京都の樂家の宿老に質問を發し、その答を得、更に自家に用ゐる所の說を以て伶人家の答の非を說いた俗樂問答三卷は公の斯道に於ける造詣見識を見るべきである。

尙繪畫に就いて一部の書はないが、壯歲には後素の道も學ばれ、その數幅は今もその裔孫松平定晴子爵家に存し、繪卷物の研究は集古十種にあらはれ、また退閑雜記にも所々にこれを述べられてある。今それらを拾ひて假に後素漫筆と名づけて卷末に添へた。これは公の全き考をまとめたものでないが、その趣味の一端を示す爲に試みたのである。

松平定信は田安宗武の第三子で寶曆八年に生れ幼名を賢丸といひ、字は貞卿、旭峯と號し、安永三年幕命により白河城主松平定邦の養子となり、天明三年襲封、越中守と稱す。同七年老中の首座となり、侍從に任ぜられ、十一代將軍を輔け、田沼時代の弊政を一新し、銳意治を圖つた。文武を奬勵し、儉素を以て自ら範を垂れ、財政を整理し、風俗を匡正せんとし、奢侈を抑へ、異學の禁を布き、貯蓄米町會所の制を定める等寛政の治の見るべきものがあつ

たが、寛政五年將軍の輔佐並に老中を止め、少將に任ぜられた。同九年致仕して樂翁を號し、文政十二年五月十三日七十二歲を以て卒した。深川靈巖寺に葬り、守國院と謚した。著書が頗る多く、忘住所感の題にて

心あてに見し夕顏の花ちりて
　尋ねぞまよふたそがれの宿

の秀吟あり、天下傳へてこれを稱し、世にたそがれの少將と呼んだ。

凡　例

一、本書所收の蒐裘小錄、俗樂問答は樂翁公遺書により、浴恩園假名の記は侯の自筆本により、老の波は樂翁公遺書本を底本とし、家藏の樂亭茶談本を參考として多少の補正を加へ、後素漫筆は退閑雜記本に據つた。

一、侯の假名遣は浴恩園假名の記によるものが原形である。樂翁公遺書所收のものは契冲等

の歴史的假名遣に據つて訂正した跡があるが、爰には底本のまゝとした。
一、句讀法に於ても底本のまゝで漫に改めることをしなかつた。

藝苑漫筆五種　目次

菟裘小錄……一
浴恩園假名の記……一九
老の波……三九
俗樂問答……六九
後素漫筆……九九

菟裘小録

―一名　草のよすが―

閑情偶寄などみてもひとつも我が心にかなふやうにおぼえぬは、唐やまとの人のふりもたがへばさあらんかし。たゞ世の人は名を得てんとおもふより、たのしからんものをも心ありげにみせんと、樂しむ風情するものもあり。かゝるは偶寄にある事とて、めづらしきをてらひてせむは、わが心より出でしにはあらずなむ。いざ予このむことかいつらねんと思ふが、人はさぞこゝろにかなはざらなむ。とまれかくまれ、わが爲になすにして人のためにせざれば憚るべき事にもあらずなむ。もとよりこゝにかいつけぬるは、わが輩の常のとのにはあらず、菟裘の營のこゝろもてしるす。

屋

やのむかふところは、世にもいふ如く、南にむかひて、そのうらは北おもてになす常のことなり。されどたゞ心あてに南とさし北とさすゆゑ、南にしのすみにむかひ、あるはみなみ東のあたりに向ふたぐひ多ければ、雨風ことにわづらはしく、または夏の夕つかたなど入日さし入てくるしきぞかし。されば磁石てふものをもて、南北をさだめぬれば、一筋の南の風は雨などもつよはふらず、はげしき風もなきものなり。

北とてもおなじ。たゞ風はすみより吹て、南と東とたゝかふゆゑ、つより行くものなり。正しき南おもてならば、夏はすゞしく、冬はひるつかたより日もさし入てあたゝかなり。南のかたには松、蘇鐵なんどの盆にうゑたるをならべ、北には蘭なんどを夏はおくめり。花あるものは、多く北の庭にうゑぬれば、われに向ひて咲ぬるぞかし。

母屋のやは、かやにしたるをよしとす。板をもてやをつくり、上にかやあつくつくれば猶よし。さなければ、むかでの蟲のいとくさきが、五月雨の頃よく出るものなり。天井は板なるべし。ともし火にてもあれ、かやりの煙も、おのづからこもらず。

ひさしは、土をもりて草など植うるにしかず。雨霰にもいと靜なり。玉水もたゞ〳〵なれば、うるさからず。かはらは水はしりておどろ〳〵しき音すめり。銅の屋は雨おちぬるぞあしき。とひてふものを設けて、玉水をかけてかたはらのうつぼ柱やうなるうちよりながすも猶音はやまず。まして竹や木もて作りたるは、忽ちにやぶれてもれ出る音もむづかし。

壁は黄の色もわろし。ましてあかきみどりなる土、からめきていやし。今いふところ大津なるぞ、烟にもすゝけず、書畫などかくるにもいとつき〳〵しき。

障子は、畫もよし。へりをはりたるは古き習はし殘りてをかし。色紙などいく所にもはりたる猶をかし。畫も墨畫の山水なんどは大きなる殿めきてあしゝ。海邊ならば濱邊松などをかき、山ならば山か森林などかくぞよけれ。月などかくはいと口惜し。すべてふたつなきものをかきては、床にかくる畫などにより、いと心たらずみゆるなり。

すだれは、いよすもをかし。たゞのいふみすてふものゝへり、布なんどにてとりたるもをかし。金らん又はくはの紋などつけたるは、尋常のやにては見苦し。枕草紙六位藏人などの事かいて、庭いときよげにて、紫革していよすかけわたして、ぬのさうしはりてなどゝもあなり。いよすは、いと細き丸き竹にてつくりたるものにて、加茂の社にもふるきが殘れりといへり。予は驗記の畫などもてかうがへぬれば、みすよりは少し竹のはゞひろく皮も去てつくりたるすなるべし。いまのすだれよりは、細やかなるは、通例のすだれなり。これをいふにはあらずや。細き丸き竹ならば、みどりなどゝもいふべし。ことに驗記は後白河帝の行在所の圖なれば、ふかきいよすかくべしともみえぬを、ごふんもてすをかいたるをみれば皮とりてけづりたるものなるべし。

雨戸ほど世にゝくきものはなし。いで夜はになりにたりとて、ひとりふたりいでゝ戸をおし出し行けば、車のごとくとゞろき、かみのなるやうにもきこえて、そのうちは、しづかなる物語もうちやめて居ぬるも興なし。せんかたなく、聲たかくしてしづかにせよといふもうし。しとみか、または明障子一ッに、戸二ッづゝしたるは、くらきやうなれども、そのうれひはなし。

はき清むるも、程こそはありけれ、この風にも塵たゝせじとて、水などうつもわづらはし。ちりはもとよりあるべきものなり。うるしぬりの調度にちりのかゝれるは、初霜のふりはへたらんやうにて、らでむなども、霧へだてゝ山の木のは見る心地すれば、

わづらはしく清めんよりもはるかにまされり。されど、ちりにゆびのあとなどつきたるはわろし。はしら長押すのこなども、日々にふきぬぐはせて、鏡のことみゆるやうなるをよろこぶこそ、いとつたなけれ。朝とくより、ずさなど寒きにもあつきにも、犬の如き姿し、すのこなどぬぐふ、いかに下部に生れしとて、かくはしゐてなさしむるにやと思ふばかりなり。ことに柱など、手のとゞくあたりはぬぐへど、その上の色かはるも見苦し。つねかくするをきらふにもあらざめれど、隱居などの清雅のいほりにかくするはいとにくむべき事なるをいふなり。風流も清雅も、かゝるわづらはしき事なきところありぬべし。蜘のゐなど少しづゝ木の枝にかゝりたるが、朝戸出にみれば、いとしろう見ゆるもをかしきものぞかし。落葉のところせくちりたる猶をかし。草のおひ出るも、かげたかうなるも、枯わたるも、あるべきほどむら〳〵とあるこそよけれ。花のちりしくはいとをかし。あるは庭だつみに散うかぶも、または木の下に雪のごとちりしくを風のさと吹來れば、花の浪うちよせてみだれあふが、そのうちにひとつふたつ二三間もまろび行、または風にうづまくもある、いと興あり。

杉戸は白地にしたるぞ、古ふりにてよきなり。杉のあかき所ばかり集めたるも、又は砂などもていたくすりて、はだへは、女わらべのおそろしきもの見たらんやうにな すは、何のためともおぼえず。

障子は、明りしやうじこそよけれ。こしたかうしたるを古きといふは元龜天正なんどの昔ありしにや、そのむかしは多くあかり障子なり。

釣殿は今はたえてなき事なり。家のうちに水面などみるも、所にもよるべきか。されどもまたこのむ事にもあるまじ。

たかどのは、せばきにしくはなし。つくりたてしころ、めづらかなるうちこそはありけれ。つひにはえのぼりもせず、いつか不用の調度のをさめ所となりぬべし。

すべてまどもたなも、むつかしきは、風流うすきものにこそ。

障子などの及に、色紙はるはをかし。歌なども其繪の事よみたるやうなるもいやし。あつもりくまがひのかせんの繪に、素性がよみし「ちるとみてあるべきものを」といふ

歌をかゝせ、西行の故郷の門のぞきしに、「まよひをば誰が教よりしりそめて」といふ歌などかけり。この心は、ものゝふの敵をうつはさだまりたる事なり。そのなすべき事、わが一念のまよひし心をもてものしたるなり。されどくまがひいまものかたりによりてかくはいへど、かの幾をみてたちしにやともおしはかるゝ事になむ。子をおもふは誠なり、世をすつるはまよひなり。

承塵は虫など上よりおつる事なきには、寢所などにはあるべきか。軟障は、所々にひきたるもよし。高松の畫に松のさねにへりのうらおもてしたるも、所にこそはよるべけれ。あまりにこと過たるもくるし。琉球のうれんのひたひの白き布に、歌からうたなどかいたるもをかし。こと國のものなれど是等はをかし。

ひき手は、革または麻の組緒もよし、かなものにてさま〳〵のかたちなしたるはいやし。竹のふしを中にして、うすく切たるもをかし。釘かくし、くろうまどかなるこそよけれ。

こたつといふは、地爐のうへにやをつくりたるなり。夏はその爐にふたするもみぐるし。また疊いれかへたらんは猶あしゝ。やゝ夜寒おぼゆるころ、又は五月雨のふりつゞきてひやゝかなるに、腰のあたりにておとするに爐に火入て屋をかくれば、しめりふかうて屋もかうしも汗ながすやうになるは淺まし。三つにをりたる屏風のうちに火爐を入れ、上にふすまのやうのものかけたるは、何方にもうつしつべし。

棚の小障子に金銀の砂子まきたる、いと見苦し。ちいさきもの故に、かゝる事も出來るといはんばかりにみえて、あるじの心のしらるれ。小さうしは、かくするものと心得るたぐひの人は論もなし。

いすは、ひきくしてうへに坐する事も出來るやうにし、又は、つねのごと坐して、しりにしく事も出來るぞよき。から人のまねにこしかくれば、足いとふとくおぼゆるなり。かうよりなどもてひざの下をつよく括りおけば共わづらひなし。されども、かくして腰かくるにも及ばじ。

枕は、夏は風とほるやうにすべし。わが肩のひろさをもとにして、少しづゝ高下すべし、衾は、わがせいしたる花月衾にこすものはあらじ。

つりかうろも、雑要集のかたなんどはよし。鶴のまふすがたなどはいやし。かゞみたて、古きのはよけれども、むかふにはおもはしからず。

机は、わが足底の長さを高さにすると、持明院家の傳なり。されどわれはひきし。坐してわが帶より一寸半ばかりたかきをよしとす。

硯は、たかさ五分六分なるぞよけれ。ものかくに勞する事なし。石はさま〴〵いへど、いづことふもなし。雨はた、積王寺、鳳天石のたぐひ、皆よきにはあらず。高島、かも河などにもすぐれたるもあるなり。端溪などいふは、よき石多くいづるにて、みなよきにてはなかるべし。予鳳天石にひとつ、赤間關にて眼のある、これらを奇硯とす。よて月花と名づけ、一ッは四靈とす。竹硯もよし。澄泥はその製による。鐵はあしゝ。さび出ざる法さま〴〵あれどえうなし。筆洗は、白かねをよしとす。ものかくに、それ硯あらへ、新汲の水をと、さま〴〵いふものは、ものかくことさらふをのこなり。硯箱のふたの中らに、くわんうちたるが常用にはよし。古代のぶんこのふたに、くわんうちたるものをみる。予にさきたちてはやつくりしといふ。かたはらにある調度のうちに、これぞと思ふ事なきものはたばこ盆なり。もとよりちかきころわたりそめしものなれば、ふるきすがたのうつはものあるべきやうもなし。火入ちひさきは火きゆ。大なるはおもし。かねはよけれども、火などいれかふるとき手をやくなり。さま〴〵便利なる事なしゝは、猶わづらはしくて用にもたゝぬものなり。

書燈は、かろくしてまどかなるべし。玻璃をはりたるはくらし。夏蟲の飛入て油のうちにてさわぐをみるもくるし。なつはちひさきもぢもてはりし、三つ折のべうぶのうへに、承塵のやうにもぢつけたるをたてまはせば、はひも蚊もちかづかず、ひるつかたうたゝねするにもよし。

かけ物は、うへのかたに上りたるもあしゝ。また軸の下につくばかりなるもあしゝ。

三幅二ふくによりてかくる釘をさをにてよきほどにひだり右へよせぬるは、くるしくて心ゆかぬものなり。床にかくるもの、つりあげたるぞよき。棚もかず〳〵あるはうるさし。かざりするも法あるやうにいふはをかし。たゞ人のみてよきやうにかざるべし。重きもの上の棚へおくも危く、おもきものゝ下に玻璃器磁器などおくもあしゝ。大なるものを上にし、ちひさきものを下におくもあしゝ。されども物によりて、つねを變じて興ある事もあるなり。かけ物の繪にさはるものははぶくべし。

臺子の釜は、ふるき鐵こそよけれ。されど白がねまされりとす。やごとなき御殿めきて白がねも似ず、鐵につくりて底なく、うちに白がねもてうすくつくりて、湯をいるゝにしかず。火きえてもとみにぬるまず、錦きてうすものおほふたぐひにてをかし。

扇かけてふものは、いとおもしろからず、たんざくかけもそれにつぐべし。よしの屏風に扇おほく掛ならべたるは、時にとりて興あるべし。とふのすがごもをかけて、そのひと符の間々へよみ出たる歌、又は兼題などいふものかいたる短冊はさみおくはをかし。柱にかくるよりは三符もまさる。されども是らは所にもよるべし。

庭つくりとて、世わたるものゝするはいといたういやしく、松などもさま〴〵に枝たわめ、ときは木を丸くかず塚おほくたてたるが、さては七五三の膳部の上をみるさまして興なし。庭はたゞ地勢といふものあり、海ちかきところは、たとへ海などみゆるにあらねども、木だちといひ、吹かぜまでも、海のおもむきはあるなり。それをみやまのつきにつくらんとしては、おのづからのけしきにさかふものなり。石にも海と山とのたがひあり、せばき庭ならばともあれ、廣くばその地勢をかうがへてつくるべし。水など流るゝならば、山河のやうにし、瀧おとしなどつくらば、手ごろの石は、わけもなくたゞ高くなげあげて、おつるときのおのづからの姿にまかすべし。大きなる石は、源のかたにむかふべし。小さき石は、流のすゑに向ふべし。（山河のはげしき流は、大なる石には水あたりて、下の土うがつ故に、上流のかたへあゆみ行ものなれば、みなもへむかふなり）もと生立し木は、南のかたをしるしつけて、庭へうつすにもみなみのかたをたがへざれば、おのづからおのが姿をうしなはざるなり。すい

がいなども、事そげてつくりたるはをかし。庭の門などは、あけ戸、あみ戸、織戸などさまゞ〳〵あるべし。もとより、しばのき、あじろなど難なし。庭に欄檻つけたるはかの國ばかりともみえず、臺の竹なんどのやうに臺つくりて、名所の木草うゑたるはをかし。庭へうゑてをかしきは、梅さくら松はさらなり。松は小まつもよし。五葉もよし。立花もみぢいてう柳荻はぎ薄くづつたなんどもよし。きよ柳はせをなどは石もつき〳〵し。竹はいとよし。河竹呉竹もをかし。ひろき庭は、もとより名も知らぬ木草とてもをかし。秋草はみだれあひて、朝がほもそのひま〳〵にさきしぼめるぞをかしき。草のうちにさゆり撫子などめづらし。露おくも雨も、くさむらほどをかしきものはなし。むぐらよもぎも所によりてこそをかしからめ。ひろき庭は、處々に心かはるやうにこそあるべけれ。菊も竹などそへてつくりしよりは。みだれたるぞよき。ひさしの下には文車一二軸もあるべし。

茶室てふものあり、つたなき事どもを定めたるものなり。中くゝりなどのくるしげなるも、にじりあがりとて、ひいさき戸あけてはひ入るも、風流の事は地をはらへり。名もあるべきを、かざりせつちん、なかくゞり、したしまどよりして、ほらとこ、くさりのまなど、すべてくるしき名のみなり。三疊臺目は名はあしけれども、つくりなしし所はをかし。されど方丈の室はまされり。しやうじ四ッならんで、すのこより入るやうになすこそよけれ。

額はさまゞ〳〵あり、唐めきたる所には、らでんまたはしゆすなどにてはりたるもの、わびしげなる處は、ごふん地に墨にてかいたる、その餘、朽木にて文字つくりたる、石字磁器のわれたるなんどにてしたるも、鉛にて鑄たるも、またうちこみてけづり、水につけてはじめうちこみし文字の高く出たる、又は、わらび縄にて字をつくりたるも、結縄の意もありぬべし。額のへりは、うんけんもことはり過たるやうなり。黒漆さらし竹、又はくろき竹のたがなど、あつく入たるもをかし。朽木にてほりたるは、文字さへわからぬは、設け過しでいやしけれ。

石燈籠、寺社などよりとり來るさまなどはいとわろし。石おほき庭に、いしの盥鉢もいかゞなり。かけひはをかし。たとへくみためし水を源にすとも、流るゝ水の清きをもてなしゝ意なれば、とりかまへて風流をなすたぐひにはあらず、さればゆるすべし。石燈籠と腰にさぐる印籠は、すがたのみにして、えうなきものとなりし。

ふうれいは、律にあへるぞよき。風ふき來りて合奏調和するぞいとをかしき。

浴室は、いかにもせばかれ、廣きは寒し。桶はいと淺くちひさくし、湯に入る深さは七八寸ばかりなるべし。そのうへに底なき桶の三尺ばかりなるをかさぬべし。湯の氣をみたすれば寒き事なし。湯少なく腹に及ばざるほどなるべし。

ひろき庭は、もとより地勢にしたがふ計なり。わが心にたくはふる事なく、池ほるべき地勢ならば池をつくるべし。かまへて池をつくり、田をつくらんと、しひてはかれば、似あはぬ景色ぞ出來る。されども室町のころも、庭といへば、木などつくりたる事とみゆ。唐山の風なるべし。わがいふは、野山のまねびなれば、のやまにあきたるものは、庭をまたのらとせむ心もあらじ。庭つくりのふみなど見て、ほどよくするにしかじかし。われはかくおもふ也、よその庭も、野山のまねびせよといふにはあらず、造作もわがなすはかくとかけるにて、人またせよといふにはあらず。

浴恩園假名の記

浦わの翁のすめる里はつき地といふ。西のかたに柴門あり。いさゝかの廊あり。廊のすのこにつまどあり。こゝより入りぬればまどかなる額に樂の一字をつけたり。そのうちは翁のはや起臥する所なりとぞ。それを千秋館といひて、輪王寺親王額かい給ふとかいふ。西のかたにいとさゝやかなる間あり。これを日新簃といふ。千秋館は南おもて、しとみつまど設けぬ。東のかたは養氣室となづく。そのひさしよりつゞきたる小室のおもてに清風明月の額かけ、内には風月の二字水月君のかい給ふを、もがみ川の埋木につけたり。うへには翁がむかしよりみし山河のけしきをかゝせて張り、其額に處々青山是故人とかいふ句を阿波の拾遺かい給ふ。又そのつゞきに一樂の文字かいたるあり。千秋の庭は南に池あり。西は盆松などを初めとしてさま〳〵ならべ置て、翁日ごとにみづから水などそゝぐとぞ。軒ばにいと年老たる松ありて、石華などおひぬ。其かたはらの梅は名もなき物から清香ことなりといふ。左のかたに櫻あり、これを常盤(ときは)さくらといふ。これも蒐裘へうつりし頃うへたり。軒にならぶ計りなりしが、年々にいとたちのびてけり。この花、園の花ちりぬる後も盛りをのこせば名づけしとや。軒の下には流れのかたちありて、白きさゞれをしきたり。玉水のおちてながるゝも盥石の水をもこゝにおとさん料とぞ。この流れに石の大なる橋ありてひろさ六尺長さ一丈三尺餘、千代の岩ばしとかいふ、その下に紫の石あり、こは下邸よりうつせしなりとぞ。南のすのこより七八間にして芝うゑたる所はまひまふ臺なり。其むかひは池なり。池のきしは千とせの濱といふ。池は春風を名とす。其池の中らに松のをかしうおひたる嶋ふたつありて、名殘の島といふ。一つはなごりの小島といふ。こはむかششほがまの浦みにいきたる折、明ぼのに松嶋のほの〴〵とまぢかきが二つばかりみえしを、身にしみておぼえしが、このふたつの嶋みれば、かならずその曙のことおもひ出すとて名づけしとかきゝぬ。またかの岩橋のかたはらに柳あり。きぬがさと名づく。こは六角堂の柳の枝さしたるなり。いまはその六角堂の柳はかれうせて、こゝにのこれるもをかしきと、都人はいふとやらんきゝぬ。こゝに門あり橋あり、松の大なるが

橋をおほへればにや、松濤深處の文字を門にかけぬ。はしを出れば色香のそのにて、梅多くうゑたり。門と橋の間には大庾嶺の梅とめこかし、小倉のもみぢ、まがきの竹とをうゑぬ。まがきの竹とは、さくしのかたはらに竹をきりておほくたておきたるが、いつか根つきて枝葉しげし。めづらしとてこゝにうつしたりときゝぬ。かの館の西のかた盆玩などならべしあたりには、さま〴〵の蓮をかめなどにうゑおきてけり。こゝに露臺あり、望嶽といふ。ふじはさらなり、はこねの山々ものこりなうみゆ。もとこの地は高からねども、みわたすあたりに山も森はやしもなきにや、千秋館の窓よりも坐してふじをみる。江戸のうち高きところはあれども、樓臺ならで不二みる事はいとまれならんかし。臺のかたはらに小柴かき引まはしたる一つの園あり。石いと多ければ石園といふ。さま〴〵石もてたゝみて山とし池としてつくれり。おほくのいし色も姿もさま〴〵なるを、たくみにつくりあげたるは、この翁のしたることにて、石はみなこの園中の池のきし水のなかなどにうもれゐしなど引あげたるなり。もとこの園は獻廟のころ、いなば濃州の別莊にして、知るところも小田原なりければ、それよりもうつし人よりもきそひても贈りけるが、石ことに多し。橋邸このやしきかへ給ふ折も、木石御心のまゝにうつし給へかしとねぎたれば、多くうつし給ひしのこりなれば、むかしこちたきまで石ありしをも知るべし。翁こゝを我物にしても、かゝる名園古跡の木石みづからのものとせず、聊もこの園中の外に出さず只この園のうちに石五つは翁のものなりと人にもいへばあやしみわらふ。そはこの石園に二つは大洲の君の船底にいれし石の不用なるをいれしと、日新軒の下に白き絲の平らかなる二つは本邸よりうつしゝなり。石園の中央にかはらをふちにし土もりあげて牡丹をうゆ。石山の下、池をへだてゝ疊二つ餘りしくべき石のうへに亭を設けて、露盤に涼風の字あり、げに木だちしげりて、夏もこゝに來りぬれば、ひやゝかにぞおぼゆる、その山の上に堂あり、もと田安の姫君こゝにうつり給ひたるが、とみのやまふにて身まかり給しを、あかず名殘思ひて、地藏尊一軀をつくり安置して、三とせがうち日ごとにまうでけり。

みとせ過てその像をば深川の寺に納めぬ。その堂もようなかりしを、北のかたひたすらにこひ給ひて日蓮の像を置給ひて、今は妙華堂とかいふ。山の下門あり、大なるうつきの二つ三つあればにや、うつぎの關となんいふ。此關をこゆれば、右は池左は櫻のなみ木にて、きぬ櫻といふもこゝにあり。遲櫻にて色かことなれば、ときはととも にめづる木なり。こゝに亭あり。浸月の額を小田はらの君かき、繞花のは村上の君かき給ふ。二つをあはせて花月亭といふ。げに花の梢をみるはこゝなりけり。寒山の山にある櫻ことに高けれども、よその梢にかくれてよそよりはみえず、こゝにてはそれも殘なうみゆ。また月も東山より出るをまづこゝにみる。池のさゞなみにうつれるのみかは、春風の池をたてさまに、しらさきのはしまでみゆれば、ことにひろうてしま〳〵のうかめるさまもをかし。亭の左のかたに大なる松池に臨めり。又いと大きなる石あり、青きなかに白きすぢありてむかしより樊僧石とかいふ、一丈ばかりにめぐり一丈四尺といふ。高くそびえたてるに、ばせを打茂りてめぐりそひたるよし。此石をかくいふはいかなるよしも知らず。ある人のいふ、此石いと大きなれば門くゞして園へいれしよりともいふ。石は左にて右は池なり。山ぶき小でまりなど春咲交れり。左のばせをにはまた櫻ぞつゞける。木のもとは菊をうゑぬ。こゝに又關あり、葉山の關といふ。竹いとしげりてをぐらし。

それをめぐりて出れば亭あり枕流といふ。この亭のまへに澗水のながれしが、今はたえたれど、そのあとはのこれり。このあたり、棕櫚多くてからめきたり。これより、はるかぜの池の岸めぐる、左右はみな櫻にて、山吹木のもとにしげり、つはぶきはきしべにあり。このそのはことにおほし。行先の山も尾もしげれるぞ多き。またあせみかず〳〵あり。かの濃州むかしあつめしとかいふ。此道をすべて花の下道といふ。行き盡くせば右のかたに道ありて馬場へ行く。それをもよそにして行けば、おほきなる松の二もとありて、板はしをわたる。こゝに櫻の淵とてさま〴〵の石をあつめしところあり。そのうへに峯のかけはしともいふべき柴橋のたかうかゝれるを、花の

かけはしとかやいふ。板はしの中らに亭あり、釣殿といふ。これよりみれば向ひは春風館なり。なゝめにみればかの花月亭なり。嶋々みゆるもをかし。板ばしをつくせば又右に坂あり。左は濱べにて山ぎはつゝじ山ぶきのたぐひおほし。もと櫻はすべて枝をならぶれば、みな花をもて名とす。このはまべをしのゝめの浦といふは、有明のうらよりあけぼのころみれば、こゝらのふちの花うちかすみて、横雲のたなびくやうにみゆれば名づけしとかいふ。又はじめの右にあなる坂をのぼれば、木曾はこねともいふべきけはしき道の竹のうちにあるを、竹を力にのぼりくだる道を竹の細道といふ。それより月とふ里といふあり、馬場の亭なり。嘯月廬といふ。幽篁のうちなり。この道には花のかけはしわたりても行きつべし。馬場は七八十間ばかりにて、東に鳥銃ならふ處あり。左右石にてたゝみて、銃丸のよそへ行かざるやうにつくりしものなり。馬場の左右は、はじの木うゑて下にはうぢのちやをうゑたり。このさとより竹のうらを暫くゆけば、秋風の池の向ふなるもみぢの下道へ出るとなり。月とふ里のあたりに石

ふみありて、初の句は忘れにたれど、春風秋の風吹らん末のそでもゆかしきといふにて、李氏の園よりも高しといふ人もありとや。またこの里をばとはで、はまべのかたをゆけば、山のうへに遊仙亭といふあり。もとはうぢの鳳凰堂をひなの屋のやうにさゝやかにつくれりしをいれたりしが、鹽かぜたえずふけば、その堂なども破損すればにや、大塚のなりところへうつして、今は布袋を安置したり。此山を高岡山といふは鳳凰ありしよりつけしにや有けん。高岡山のつゞきのたかき山は、むかしより風をり山といふ。海より吹く風をこゝにてくじきとむるとの心にや。山のかたちゑぼうしのやうにむかしはありやしけん、今はさもみえず。打のぼれば風神などまつれるやしろあり。たつた山の心ともみえず、されど山のうしろはもみぢ打ちしげり、前は櫻ことにおほし。南のふもとは月とふ里なり。山上山王の林なども青うくまどりたるやうにみゆるなり。その山々のふもとなるはまべを行けば橋あり、こは春風秋風の、二つの池の半らなれば、二水などとかいひけんによりしや。はしをもしらささとよぶ。その

はしをわたりて春風館のかたへは行かで、左のけはしき山道をゆけば、山吹荻などしげりたる細道にて、色ねの道とかいふとぞ。その坂は秋風の庭へ出る間道なり。その小みちよりせざる輩は、感應山のふもとにつきて春風の柳や庭にゆくめり。又そのはしをわたりて高岡山の東のふもとを行けば、紅いとおほくて、もみぢの下道といふ。この道いと長し。左は竹のはし右は秋風の池なり。半行くあたりに芝はしありて嶋へわたる。こゝに辨天を安置す。橋邸のときにかはらず、邸の尊像なり。その島の西北に小嶋あり、松の小嶋といふ。又この辨天の嶋より東へ出し崎をとめが崎といふ、ほそく一筋に池に出たる道なり。向ひはいなりのやしろなり。又それよりもほそき道の出しをとりゐが崎といふ。むかし堤ありし處の大なる松、いまもつかの如く高きうへに生ひそひぬ。こゝに小亭あり。操琴屠蘇といふ。この崎にうちにながれうがちてしほいとみちぬれば、こゝよりながれ出るおとゝ松とをあはせて名づけしが、のちに柴ばし出來てよりはさせる事なけれども、松風のしらべとのみぞ今はなりぬる。むかしはそのつゝみ感應山につゞきて、つゝみより嶋までは石などありておどりこえてゆきぬ。今の秋風の池のあたりは、よしあしのみしげりて、御池にもあらざりしなり。ふたつの崎のあふところにはしあり。そのはしをわたれば、いなりのやしろに行く。やしろも橋邸のころよりありしがまゝなり。それより池を右にしてあゆめば、かのあしろの床まねびたる尾あり、それをやしろのうらといふ。はじめの芝はしをわたりて、もみぢの下道をはる〳〵ゆきてもこゝに出るなり。こゝより大海のうしほ此池にかよふ道あり。こゝに又山あり。さかをゆけば、竹の林にて孟宗とかいふは殊にたけたかう打なびけり。坂をつくせば、小松のうれのうなばらを見る。いはゞうぢのあじろみつゝ、山ざとゝいはんと思ふが、おもはずうらわへ出し心地すめり。こゝをなんくづれずのきしといふ。むかしあまたゝび高しほのうちきてくづしゝより、石などもて岸をもつくりければ名づけしなるべし。こゝに亭あり、蓬流をもて林の君名づけしなり。福山の君かきて、ほりしは松浦靜山翁なりけり。こゝはつねの亭と思ひてぜしやうな

どのひまよりみれば、高樓のうへなり。いかにととへば、過しころ秋風の池のいと埋れにければ、その土をほりとりてもせんかたなく、皆こゝにもてきたり、くづれずの堤もひとつ山となしなば、いとゞかたからんとておくまゝに、櫻の下のかたはみなうづみて、道は高樓の上にうちつゞくやうになれり。されど樓の南面はかくうづみて北東のかたは土もらざれば、下よりみればつねの樓なり。これもひとつのみるめとなす。下は竹生おひしげりて、七つのなにとかいふ人の遊ぶべきところなめりといふばかりなり。これより竹の林をゆけば、又堤ありてさま〳〵の名ある竹うゑたり。左にみつゝゆけば、まはぎの關なり。いなりのやしろの前のかたよりゆきても、此里路にいづるなり。この關は萩あるをもて名とせり。その關をこえて左のかたへゆけば、尾花の堤とて、左右に尾花打しげりて、わけわぶるばかりなり。尾花のなかに小高き山あり、船のかたちしたれば、ふな山といふ。今はその山いさゝか處をかへたれど、尾花の波にうかめる船のことおもはる。山にはさま〳〵の木ふかくおほし。その山をこゆれば、

ひろき野に尾花打しげり、中には萩、ふぢばかま、ききやう、われもかう、小ぐるまなんど、ところ〳〵に咲まじれり。こは秋風池のきしべの野の原なり。又かの關より右のかたへ行けば、冬さく菊かず〳〵うゑたるに、水仙などおほし。こゝに柴門あり。浴恩園の額一橋の中將の君かき給へり。海翁の君よりをくり給ひし。（この柴門今とし菜山の關につくりかへて此額かけたり）孔雀（くじゃく）めん羊などかひおけるもこゝなり。そのきくあるところの左はふぢばかまのみ多くうゑぬ。花園多くありて、小亭衆芳の額秋田の君かき給ふ。花は牡丹、さくやく、仙翁花、雞頭、菊などさま〳〵うへ置てけり。こゝもまたいとひろし。末のかたはなすさゝげなどもうへたり。名所の木草のたね年〳〵にこゝにうへて、生たつ頃は大塚のなりどころの園にうつすとかきく。亭の北は黄なる花と唐國の紫のと、吹上のはまの白菊とをわけて多くうゑたるはおかし。亭を出れば花菖蒲いとおほくうへたり。はゞ三間に長さ十一間也。それをみつゝすぐにゆけば、千くさの園なり。園の左右は挑いとおほし、さま〳〵の花さく錦の如し。こゝにも蓮池有り、池の上も堤ありて高潮の折、しほ水

をいれじとの料なり。この池は四間に十八間なりといふ。千くさの園は多く藥草などうへたり。園の半ばより尾花のうちを左にゆけば、秋風の庭に出づ。秋風の池の波よするきしなだらかにして、しほひのけしきもめづらし。こゝをみなと田といひていなつくりしが、しほ水通へば、つゐにいまはやめて、みなとだのうらなどくゝりいふめり。尾花の中には松とところ〴〵にありて、二三尺ばかりかこむばかりなり。吹上浦、高砂、田子浦、岸姫松など殊に大なる松なり。もとは紀州の公主手づからうへ給ひしを、三もとさゝやかなる盆にうゑて賜ひしを、こゝにうつしたるが、三十年餘りに、かくはなりにけり。ことしはめづらしく花もさきにけり。山の上亭あり、秋風の額ひろはしの儀同かき給へり。亭上より池をみわたしぬ。尾花も波そへたるをかし。このあたりの山はみな、つはぶきおひしげりて、口なし山などといふ。亭の北のかた小たかき所に又小亭あり、山間なればにや、樂山の文字をかけたり。亭のうしろに露臺あり。のぼればかの桃をみ、夏ははちすをみる。露臺清香の額は東のかたにかけ、凞春の額は西のかたにかけたり。其の亭を辭して口なし山を過ぐれば、南は感應殿といふ額ありて、觀音を安置す。山の右へ橋かけて、そのはしの下を行けば楊柳池のかたへ出ると也。それをへだてゝ堂あり、仰瞻の額ありて拜殿なり。その山に對してあるを、かざしの山といふ。山の上に亭あり、四時亭とかいふ。のぼりてみれば、東のかたは紅葉のこのまより秋風の池をみ、南は花の木の間より春風の池をみ、西は梅その梢をたまもの池のきしなる松のうれよりみる。北はたまもの山山の間なる千代の細道なり。かざしの山といふは、藤さくら山吹紅葉などあればにや。ふたばの葵もあれど夫のみにはいはじかし。額は卷物にして、畫にてもじの姿をなす。春は梅さくらの花にておのづから薫風のもじをなし、夏はみどりのうちのおそざくらの花にて綠蔭のもじをみせ、秋は紅葉の山水にて碎錦、冬は松の雪のつもれるにて含光となす。げに此山のけしきよつのときにかよへりけり。亭榭おほけれど、まづいはゞ春風館はむかし御殿なりしころよりつたはりしにて、其後やけにしのちも、それにしたがひてはぶきたれど姿

をのこす。花月衆芳はもとつたはりしを引うつしたり。秋風は母上の小室をうつし、蓬瀛は翁が大任のころ西下といふところにつくりし小樓をうつせしなり。新につくりしは此亭のみなり。もとより事そげたれば、おかしきふしもなきがうへに、日記にもかきたるごとくことにものをはぶきすてにけり。此山の下に小池あり、こゝはうしほいらざれば賜はりし蓮をうへしより、たまものゝ池と名づく。さるをはぶきて玉もとはあやまりなれど、池に玉もゝつぎ〳〵しとてよび來りしとぞ。左右のかず〳〵の山をも、たまもの山といふは、池よりうつりきしなり、此かざしの山とたまもの山の間に坂あり、みそぎ坂といふ。こは春風の庭もおりすぎて、藤山吹もちりぬるころ、たまものうつ木など咲出るに、はちすのかほりもすゞしく、木かげおほければ、夏をことにもてはやすところなり。この坂を下れば桐の林ありて、それを初秋のもりといひて、かたはらにははそなどもたてり。されば夏と秋との行かふ坂なれば、かくやいひけん。昔しこゝにてみそぎやしけん、なほとはまし。たまもの山の池につと出たる處に、かへでにふぢのかゝりて下に瓦しきたる處をゆかりの屋といふ。その山の坂をへだてゝ寒山拾得の像のいと大なるを置けり。女わらべなどいとむくつけしなどいふ。この山の西の坂を下れば、色香のそのなり。初め盆梅などうへたるが、今はいと名殘りもなう生たちてけり。また其坂をばくだらで寒山のふもとを行けば、左右の山々松のみ生ひしげりぬ。千世の細道とかいふとぞきこゆ。そのうちを行き過れば、かの蓮の池といろかのそのなり。これよりくだもの林とて、かきなしりんごすもゝなどいとおほくうへし處をゆきて、また色香の園に出るなり。こゝに小亭あり。琴雪堂といふ。堂の北のかたに大なる松あり。園中第一番とよぶ。高さは一丈あまりにて、東西四丈四尺、南北二丈五尺、四尺餘りのかこみなり。臥龍のすがたをなす。松を琴とし梅をきさらぎの雪として亭に名づけゝん。松のかたはらにいと大きなる覇王樹と、きりんの像あり。この地にてはみしことなしとぞいふなる。是を合せて三奇園ともいふとかいふ。その覇王樹のうしろはいとうちしげりて、つばき、山茶花、もくせいなどいとおほし。一

位の君よりたまへる椿三もとうへたり。それにそひて竹もてつくりし小亭あり。このしげりたるそとはひろき芝生にて、早梅多くうへぬ。中央にあるを立冬梅といふ。冬至などいふたぐひならず、青葉あるうちに咲出るばかり、此をなん春しる里といふは、早梅おほくあればなりけり。色かのそのゝ南は春風館なり、額は加茂の甲斐のかけり。こは承明紫宸殿の御額かいたる書博士なり。此館南のすのこは池にのぞめり。館の東の小室を楊柳亭といふ。此庭はかのたまもの池よりつゞきたる小池にて、さくら柳まじれり。感應仰瞻山をみる　いでこの館は園中の亭榭の第一なりといふ。南のかたには花のかけし櫻が淵をはるかにみ、南東はしのゝめの浦をみ、西はかのいろ香の園より有明の浦、それより鳰の通ひぢなどのしまぐをみるなり。釣このめるおのこはけしきもみずてつりするもあるべし。色かの園の南館の西は有明の浦といふ小島あり、さまぐのいろあるものをうへたれば、錦島といふ。こゝより石をおどりつゝゆくなり、こゝを鳰のかよひぢといふ。げにしほみちぬる時はをどり行くべき石もみえずなん。又こゝにはしあり、八こゑの橋といふ。はしを行けば、ときはじまといふにわたる。大なるそてつのあればなり。又橋あり、千代の長橋といふ。わたれば小島ありてそてつ三もとばかりみゆ。これをばかきは島とかいふ。大なるのは大洲の長はまといふ處の亭にありしが、その亭廢して不用となれば贈りこしたるなり。かきはのは房州又は八丈のとかいへり。島よりもどりて色香の園をゆけば、橋ありて松濤深處の額かけたる門にいる。

老の波

茶たつる事の起りてより、傳へ〳〵て宗易に及び、夫れより流派とやらんのさま〴〵になり侍る事は、世の人の知る所なればもらしつ。茶の事をなすならばよく茶の本意を知るにあり、今やうの茶はたゞ奢りの媒となるが故に、誠の風流ある人はかへりみず。たゞ名利をむさぼり器物を玩弄する輩のみのもてあそびの様になりたれば、いよ〳〵本意をうしなひぬるも多しとなむ。されども文化日日にひらけぬれば、今にいたりてはやゝ其本意のたがひしをさとりしより、高貴の人をはじめ、學問などたしむまことの風流清雅のともがらも此道にたづさはれるも少なからずと聞こゆ。猶この道のひらけなば、いよ〳〵奢侈の害をのぞきて、友どちの誠をつくしつゝ、人々よき樂しみをなし侍んと、しれたる事をいひつらぬるも老婆心のやるかたなきとやいひてまし。

うち出でゝしれたることをいひよるはかへすゞ〳〵も老の波やゆるしたまふべし

文化二つのとし　名なき翁しるす

茶といふ事をよくわきまふべし。食して茶をのめばよく食を解し、常に用ゐればよく鬱をひらくなどゝいふ。されば食後に茶をのむ事は常の事にて、其茶をたつるが何もたふとき藝にもあらざる也。今は唯朝廷の禮の如く心得て、茶の道知らぬは茶室の應對もなしがたき事のやうに心得、親しきが中にも何かこと〳〵敷振舞しぬるぞいかなる心にかあらん。されば茶は一時の心やりにして、なしても有なん、なさでも有なむ事なるを、重き禮儀の様に心得、其事をもまた高くしなさんとて、禪味ある事の様にまでしなすはいかなる事にやあらん。もと大徳寺の門中なんどにてもてはやしければ、遂に茶と禪味と混同するものにやなりけん。もとより禪も其本意を得たる拔萃の量より涌出せば、茶にもかぎらずいとも香ばしき事有べきか。今の茶によりて禪を少しく學びて、たゞ高遠の事をいひ俗をおどろかし、我心の閑靜にして自他の隔なき事なんど口にはいふとも、いつか茶器に心をうばはれ、名利に心をとろかし、人によく思はれん、尊ふとがられんとの俗情故態甚しくては、禪の本意はいづち行きけん、いとあやしむべき事とぞいふなる。

茶はたゞ人情を盡すにあり。貴賤老少それ〴〵に心をつくして程を得、朝夕晝四夜時のたがひによりても、又その程々の心づかひなすを第一とすべし。客にあひて物語するも、立つも坐するも心を盡すぞ茶の本意なるべき。是は茶にかぎる事ならねど、茶は殊に人に接對するの道なれば、いとも此心得厚かるべし。今の世やゝもすれば功者などとかいふは、世なれて人にあはする事をせにして、たゞ實意なく、その時その座に合するにて、友に接する實なし。何とかこれを言ひ侍らん、人かくいふをきかば、さぞな固陋の心なり、茶の事にも聖賢の語など引出すよなど笑ひ侍らんか。茶は人に接するの道なれば、聖賢人に接するの道をいひ出すとてもかけへだたりし事には侍らじ。たとへていはんに貴きをさしはさまず長をさしはさまずといふは、友に接するの本なり。事の是に及ばずしていひ出すを躁といふ、これに及びてもいはざるを隱といふ。先きの顏色をも見ずしていひ出すを瞽といふなど示し給ひしによれば、主客の言のうへにてのほどをも知るべし。あるひはさゝぐる者はむねにあて、提するものは帶

にあつといひ、或はおもてを見てむねをみよなどいふ類ひ、又は將さに堂に登らんとすれば聲必らずあぐ、將に戸にいらんとしては視る事かならず下すなどあるは、茶室の戸を思ひかけなくぐはらりと引あけて、たちまち内を見やるなどの不敬あるまじきにも比し侍らん。其外足づかひにも、客に遠きよりふみ出し、客に近き足より膝をるなんど、又は東階に昇れば右の足を先にし、西階に昇れば左の足を先にすなどいふ類にて、とまれかくまれ東山の詩の如く、いはぬ下の情をきかぬ上にて察したまふやうに、主客の心を得侍らん事こそありがたかるべけれ。これらの誠をもて接すべき事なるをもよそにして、かの功者てふとて便佞巧言の仕わざをまねびぬるぞ、いよ〳〵輕薄とはなりぬべき。されば茶室に入てはよからぬと思ふものまでも譽めのゝしり、戸外へ出てははやそしりものし、あるは主の仕損じを笑ひ、あるじは客のあやまちを嘲りなどして、名のみ友に接するの道にして、かくの如くたゞうつは物をてらひ侍るいやしき事とはなり侍りぬ。隱遁の士などのなすものなるを、今茶といへば富足る人に

や、うつはものは如何して得たりしやなといふ事にさへはなりにけり。

茶は一時の心やりなりといへば、いかに茶たて侍りても心のまに〳〵なるべしなどいはんか、左にもあらざるなり。其ゆゑは宗易らを始めとして茶に名あるもの、其ほど〳〵のふしをそへ文をくはへて、おのづからの法をつくり出したるなり。されば臺子より薄茶手前に至るまで、強て求めいだしたる所作はなく、皆ちりあれば拭ひ、けがるれば洗ふにて、客を敬ひ親しみをあつくして、たゞ其ほとに心を用ゐるなりけり。遠州流にても石州千家のたぐひにても、いづれも其とり所はある事にて、何れの流派よきのあしきのといふ論はあらざるなり。たゞわが覺えしところにてなすべきなり。昔の人の心用ゐしを一つふたつ言ひ侍らん。宗易ある時茶室の柱に花生かくる釘うたせけり。打つものに釘もたせ其柱へおしあつる、宗易は客位に居て、或はひくしまたはたかしとさま〴〵にいふ。かくして既に時を移せども許可せず、やう〳〵にて其所こそよけれといひけり。かの釘うつものいかなる事ともわきまへず、よりて釘の尻もてひそかに柱へ跡つけて、其釘を過ちしたるさまにて落しけり。宗易腹立てまた押當よといふ。かのものさま〴〵に押あつれどもまた許可せず、餘りの事にて、かの釘の跡つけたる所へ押あてければ、其所こそよけれといひけるにぞ、目水晶とて其頃人もいひけりとぞ。三齋翁にも宗易の物語したまひて、今茶人の、ことしの口切には茶筌の置場所めづらしくかへ侍らんなどゝいふものも聞ゆれど、珠光紹鷗宗易に至り疊の上に碁盤の目もりて、やう〳〵に爰へ水さしを置き、こゝへは茶入おくてふ事定めたる、其定めたるも今の人の面白きなどゝ、唯一通りにいひたる類の如きにあらず、此柱へ釘うつにても、其程此外にあらぬ所の見ゆればこそかくはありしなれ。既に脇さしの鞘を年頃物すきけづらせて、世に越中流とてもてはやすなるが、宗易に見せたれば、如何にも程をえられし姿なり、是にて思ひ出し侍りぬ。道具など商ふ店に古き脇さしの鞘のありしが、これは最上の姿と思ひて、不用のものながらかひ置たり。夫れは猶やゝまさりや侍らんといふ。さらばとて其鞘を見給ひたるが、實に最上の程にて、

此上なき姿なりけり、鞘などの事までもかくはありたるを、凡情の身から其よき程てふ事を知らで、新意なすこそうたてけれとはいひ給ひしとぞ。宗易或時茶の會の席にて、瀬田の橋の擬寶珠のうちに、形のいとすぐれたるが二つあり、しりたまへるかと問へど、知るものなし。古職も其席に居たるが、いつのほどにかいづ地ゆきけん見えず、歸りたるなめりと思へるに、日のくるゝ頃古職きたりて、瀬田の橋の擬ほう珠はこれとかれとの二つの姿こそよく侍るにやと問ひしに、左こそ侍ると宗易の答て、其こころざしの深きをも感じたりしとぞ。またいつの頃にかありけむ、三齋翁へ鶴の庖丁を宗易の所望ありしが、折ふし鶴はなくて鷺にてしたまひしを宗易賞して後、まないたの格好すこしひくゝ見えて候は如何にと問ふ。三齋翁廚やのものに問はせ給ひしに、定法のまな板いと古びたれば、一分計りもしらげて候とは申ける。三齋手をうち給ひて宗易の目きゝのたしかなるを譽めたまひしとぞ。其外飛石のいさゝか高きを難したるなんど、實に凡俗の人の可〻及所にあらず、三齋翁の物ずき人に越えし事はたれしらぬ者もなけれども、かくいひ給ひしによて固陋の情を打破りて、まづ在來の所作にやすんじおくべし。草履もつ手けがらはしといひ、茶入のふた疊の上におくは如何などいふは誰もいふ事也。何事も己れ至らぬうちに或はうたがひおこし、作意仕出せし事は、其わざ至りて後に悔耻るものなり。されば我等如きの眼には遠州、石州、千家なんど、孰れの難非いふべき樣もなし、只各仕來りしに安んじてとはいひたる也。

作意なしに茶たてよ、法に隨へとはいへど、又琴柱ににかはする事はいと風流を失ふ事なり。作意新意も其出る所おもしろからせんと、例の輕薄の情より出では、いと拙くしてはてはいかに流れゆかむも知るべからず。只我物になすべきなり、我ものになせば臨機應變其程を得るなり。宗易ある年の口切に、古き丸釜をいだしたれば例の七人の衆爰かしこ尋ねて丸かまを用ゐられたり。宗易みて各の物好は最も拙くこそ、予まろきを出さば四方なるをもいだされよ、人まねして又丸きをいだしては、よき釜にもせよ第二に落ちて面白からずといひたり。釜は水月の位とて、その物に應じ所に

應じて、其程を得る事大切なる心得なり。ことに是は茶の一事には限らず、何事にも此心得はあるべきなり。所作仕來りに安んじぬる事は今いふ如し。されど今の人の茶たつるは舞まふ事などのやうに心得、茶たてんとすればたつるものも心くるしきさまし、客もまに目はなたず、口つぐみて、うち守り居ぬるは何の事なるを知らず、さる心から茶筌うちの音呼吸に合はず、ひさくもつ手熟せず、水かへすときの音さえず、水さす時にかまのたぎりのしづまらずなどいふ事、宗易らの類斯る事いかでいふべき。ひさくもつ手いかほどに熟したりとてなにゝかはせん。凡そ禮てふものも唯其禮守をりてほど〳〵を得るなり。わざある事にはあらず、たゞ從容たればおのづからなす事もうつくしくあるなり。今時の茶は業とやらんにのみ心を苦めて、かの程うるなんどの本意をば知らぬ輩や多からむ。

森口といふ所にわび人あり。宗易知人なりけるにぞ、ある冬の夜ふと夜ふかく立よりたり。主悅びて迎へ入れたり。住居のいとわびたるもをかしく思ひたるに、窓の外面に人の音しけり。みればあるじ燈に竹竿もちそへて、柚の樹の下にゆき、竿もて柚を一つばかり打落して袖にして入りぬ。うち見るより是を一種の調菜にしぬるなり。いとをかしきわざかなと思ふに、さればぞ柚味噌にして出しけり。酒一獻すぎて、大阪より到來しつるとていと美しき餅をいだしぬ。宗易さらばよべより知らする者ありて、かくはとゝのへけむ、初めのわびたるさまは皆作りもの也と興ざめて、その會未半ならざるに、京に用事ありとて急ぎ歸りけり。あるじとゞむれどもきかざりしとぞ。今の茶は皆作り物なれば、宗易の心おもしろくかたらふ友はいまの茶をなす人には少なくやあらん。是も三齋翁のかたられしに、むかし宗無といふわび人の茶に、宗易ら客にゆきけり。あるじいでゝ唯今名水到來候とて、釜を引上げて勝手へいりけり。其内に宗易棚より炭とりおろしてすみをさしくべけり。あるじぬれかまをもち出て、暫く炭をみて釜をかけゝり。予も此席に在けるが、是程おもしろかりつるはなかりしいひ給ひけるとなむ。主客の意の合したる事などこれらをみても知るべし。名水を待ちう

くるに常度にかゝはらざりしぞ。實に活動ある所作にて、これらをみても其實意よりいでゝわが物になりしは、みな臨機應變かくはありけるてふ事を知るべきなり。さて其ほどをうるてふ事を今たとへていひなん。蘭の花初座の床に生ひたるに、炭なすとき香炷んとするとき、つねより少しゆるやかになすものありけり。客は此らにのかぐはしき香などつき侍るまじ。たゞ香合をみまほしといふ。これ主客のほどなり。あるじのゆるやかに香つくは、客心得て言はんにも手ばやく香つきては、客の本意うしなはせぬるにあたるべし。ことに蘭も匂へばさしていそぎて香たくにも及ばざればなるべし。されど又物まち顔には有まじき也。是はらにの花の時いつもかくあれなどいふにはあらねど、すべて客の心得ていはん事はまちがほは拙なし。又いふことの透間なきやうになすもさわがしゝ。客のまたいふ事にも、いふにあらずいはぬにもあらず、何となうにほひやかにほのかによそへて、いと深う聞ゆる事もあんなり。たゞ實意の論にして實意より出れば、おのづから其ほどをば得るならん。さればこゝに記すは假初の姿にて實意なくて是はかくせよなどゝ心得るはいと淺くつたなさいふべくもあらずかし。もとよりやむことなき人より賜りしか、又は其客の送る蘭ならば、香合をも出さず其香にまかすべし。香爐かざり置たるもその心得あるべし。ほやなどなき香爐ならば客より所望して、かの香茶湯てふ事にもなりぬらん。これは好む事ならねど長日の閑を消するにて、たまさかはありても惡むべきにはあらじ。さて其香つぐにも心得はありぬべし。世に名高き香つき置くはあるじの心ゆきのたらぬなり。客の香まされる興こそ猶かくはしかるべし。また炷ぎおける香の名聞て、其名につきたるもいやし。またほゐなきもいかゞなり。本意なきとは初花といふ香にあらしといふ香つかむも本意なし。一向にさそくまなはんはなれたる香こそありたけれ。ほとゝぎすの香に有明といふ一木ばかり有たらば、餘りつぎ〳〵しくいやしけれど、なくばまづつくべし。あるじより何といふ香にやと問はゞ、さしてすぐれたるものにも侍らずとばかりいひ置て、後の座の頃に至り主より又たづぬるふしもあらば、有明にてありけれと、

ほの〳〵といひ出たるはいみじかるべし。是らを程とはいふめり。又茶室へいりても足音高くせんも如何也。されどまたあたらしく、客入ておのづから座へつき終りたるよと、あるじの方へ知らるゝほどあるべし。すべて主のかたより此客に心おかせじ、客よりはあるじに心おかせじとする也。茶室にて相客の物語しぬるは打和してこそあるべけれ。されどいふべき事にも其ほどは有べし。いづかたへ茶にゆきしにいとよきすがうにてかくありしなどいひ、又は掛物など見ながらいづかたにも此人の筆みきなど、すべて此席にて殺風景の物がたり又は面白くをかしく茶の興を奪ふやうなるは、いと心なし。後座の花には何を生むも知らねば、待合のあたり又は路次のうちに何某の花ありとも、あくまでに賞しぬるは心なし。後の花をみて後、ほどよく庭上の花をもいふべし。まいていづかたの茶會に何の珍花出したるなどいふは無下なる事也。道具の事なんども一々につらねいふもうるさく、唯一覽して何ともいはざるもつらし。よからぬものを譽るはもとより人をあざむくなり。併しよからぬ中にもいづれかよき所あるものなり。其よき所をあぐるが茶の本意なり。茶入にていはゞ恰好もあしく藥かゞり燒なんどもあしくとも、地土よきか、一たいのとり合せよきか、持こし人の由緒よきか、いづれよき事のなきものはなし。若し一つもとり所なくば、道具見たる一禮いふべきのみ。いまどき鑒定する事を尊ぶは茶の本意にたがへり。よくいひあてしとて面白き事もなし。いかほど此品は見侍りて見覺えしと主へ通ぜんも本意ならず、いつも初めてみる心地こそ嬉しかるべけれ。道具もあまりに長々しくみるもうるさし。ざとみるものこり多し。程よくみて人へ渡して意の殘るやうにしたし。見て人へわたして今日はあつし寒しとよそ事いふぞ本意なき。まして物價の高下などいふはいふもさらなり。多くの金出して此品得しなどゝいふあるじもあるべし、いとわらふべし。茶杓をみれば筒はいかにと問ひ、茶をのめば茶名を直に尋ぬるも、いと興なき客なるべし。

茶器といへば高料なる物と心得るいと笑ふべし。高料を好まばいかけ地螺蛹の臺にこがねの茶椀のせたらんかた遙にまさるべし。宗易のかたへ或農夫來りて、月ころ日

ごろ財をたくはへて、よき茶器を得侍らんと心かけぬ。此金もて茶器を買ひ給はれといひけり。後の日農夫來りければ、かのこがねにて買置たりとて白布多く出したるを、農夫驚きて是は如何にと問へば、茶巾だに新らしくばいかほども客は呼ばるゝもの也とはいひけるとぞ、いと感ずべき事也。今宗易が書きたるもの、又は持ちたる器ものゝたぐひまで、千々のこがね出してかひえてんとするは、宗易を貴ぶゆゑにかくはしたふにてありけり。左程にも貴びしたはゞ、千々のこがね出して其手澤の存する器をかはんよりは、まづ此茶巾の事いひたる金言を我物とすべし。この金言を我物とすると、手澤の品を我物とするとは、いづれが宗易の心に叶ひぬらんと思ふにや、かの遠州のいはれしにも、器は新らしきをすと古き書にもあんなり。然るに茶は事そげて奢らぬをせにすればこそ、世の人のこは古きとて捨侍る器物も、かの數奇者は捨てずして新らしき器物よりも心あたらしくつかひぬるを、眞の數奇者といふとをしへられけめ。今此意しる人だに稀れなり。持傳へし器ならばさらなり、されど新らしき器得るほどの事いできなば、猶夫れをもうちまじへてこそ有るべけれ。殊に今の人は茶とだにいへば、器ものよと心得、その器よといふも實にわがよきと思ふにもあらず、只人まねして此頃は青磁の香合もてはやすなり。堆朱は人々好まざれば茶會に用ゐがたしと、皆世上に雷同瓦鳴して、いはゞ婦女の髪のさま、衣服の色目、世の流行を心として、いさゝかも我實見なく、世もてはやせばよきと思ひ、もてはやす事薄くなりゆくは、はやあしく思ふ情に異ならず、是にてもかの禪意は侍る事にやあらん。

宗易が千鳥の香爐を千貫にて買ひしは奢りのやうなれども、もと宗易は隱士にて世に何の勤もなく唯茶のみたつる事を業とする人なるを、豐氏より采地おびたゞしく得たれば、もとより富足りてけるにぞ、親戚朋友をもさぞ周救したりけむ。如何にして も黄金は餘り有べし。又其風流を好む隱士、守錢の奴ともなり侍らじ。されば世に名ある器にて、しかも我心に叶ひたらば、千貫にて買はむも罪とはいはじ。宗易すら千貫にてかひしとて、買ふまじきものゝ身にて買はんは、宗易の心を知らざるものとい

ふべし。殊に宗易其千鳥の香爐をかひとりて、足一分ばかり高しとてすらせけるなんどは、凡俗の量の及ぶ所にあらず。今の世の人は多く名にめでゝ、實によきかあしきかをも知らず。眞贋の差別ももとよりなく、人賴みして鑒定を得て、二重三重の箱に入れて祕藏しぬる類は、宗易の千鳥の香爐かひみしとはもとより同日の論にはあらじ。千貫の香爐は固より妖物なれど、宗易のかはんには論あらじ。其頃きそひてかゝる物かひえしは、かの戰國の風、任俠のなす所によれるも少なからずぞ覺ゆる。十家の產とて露臺をやめられたる漢文の心を體せば、千貫の半、百貫のなかばたりとも、王侯貴人なんどには如何あらん。いかにとなれば、三年の貯なきは國其國にあらずといふとて、諸侯の封地多く賜るは、これらに財費せとの事にはあらず、天下の御爲めにこそ封地賜ひて藩翰となし給ふならずや。されば第一藩翰の任よりして或は公に奉ずる用度、または臣民を養ひ、荒政の備なんどもとより一つもかくべからず。何の餘財ありて器にも及びなむ。それらの事も足りつくしたりとも、君の躬は臣民の敎ともなれ

ば、人に君たるもの其妖物をかひぬれば、下これより甚しき事ある習ひにして、臣民こぞりて無益の玩物に志を失ひぬらん。されば事たりたればとても又心得こそありぬべけれ。されどそれらの所をも能く心得て、下の風俗の害にもならず、もとより府庫たりみちぬる上ならば、心にまかすともありぬべし。

器は新らしきにしかずとはいへど、古代の品は何にても今の如く輕薄にはあらざれば、わざと古き器を捨てよといふにはあらざるなり。唯歎かしく心ぐるしきは、今の世の我よきと眞に思ふにもあらず、人のよきといふをよしとのみ心得るよりして、虛堂無準牧溪なんどの書畫、能相の品定めたるによりてたふとしとみれど、虛堂牧溪らが書畫の評論いかにといふ事も知らず、たゞ一概に能相の見に媚びつゝ、論もなく尊みぬる事とはなりにし也。はては江月澤庵のたぐひ、遠州石州の世にありし時かの茶の友どちなりければ、其書をも殊に尊しと見る也。是等の僧の外にも名僧奇僧の書畫などよくするも多くあるを、是等は茶には用ゐがたしなどゝ心得るぞ、實に如何なる

事にやいぶかしくこそ。まして流儀とやらむによりては、茶入いるゝ箱も誰か作りしにあらざれば用ゐず、此風呂此屏風この棚其家々の物數寄にあらざれば用ゐず、膳椀什具も皆かくの如し。こはみだりに亂れぬらんを制したる意ならめど、固より茶の本意にはあらずなん。始めにも記したる宗易の丸がま用ゐし論にもいとたがへるなるべし。わが新意出して自己の物數寄にまかすとて、古きにもよらず、釜を水指とし、茶碗を茶いれに見たて用ゐんは、一向に本づくところもなく、何の面白きにもあらず、これらにもかの程を得て我物となすをこそ尊しとはいひなんかし。

萬づの事に其ほどをうるこそ貴けれ。風流とても其ほど〳〵はあるなり、遠州が色紙釜てふ物あり、槇立山の繪にて月をかゝしめたり。こは一首の意を失ふなり。もと歌の心は何の事もなく何のふしもなく、唯淋しく哀れなる槇立山の意なるを、月を出しては其意にたがへり。今一つの色紙には西行法師の

とく〳〵と落る岩ほのこけ清水くみほすほどもなき住居かな

とかいへるを識るされたり。遠州は一諸侯なるが、其すかれけるに細き清水も汲ほさぬ計りの幽なる庵てふ事を、風流と心得てかくはなしたりけむ、いとおもしろからねば、其かまを改めかへて、

とく〳〵と落る岩ほのこけ清水くみて世わたる人もこそあれ

と戯れにせしなり。ありか定めずさまよひありく行脚のものゝ風流もあり、堂々たる諸侯の風流もあり、農夫の束帯したるが風流にもあらず、諸侯の鄙夫の衣き、鄙夫の住居にすみたればとて、風流とはいふべからず。夜もすがら月に向ひて、入さの山の端ながめあかしたるも風流なるべけれど、諸侯は寢るにも時刻の定りあれば、はや其時刻至りぬれば名殘をしき月を見すてゝ、戸おしたてゝぬるが諸侯の風流なり。諸侯數寄屋に反古などもて壁のこしはりたるは口惜し。得がたきほどの筆を壁に裏かへしてはらせんも如何なり。有ふれし文の反古はるべきは貴人には似合ざる事也。たゞわび人のまねするは戯場なんどにて、女のまねし法師のまねするに異ならず、何ぞ風流

清雅といふべき。會席にて出す食膳も其分相應にこそ有べけれ。糠飯疎菜を調して貴人より下賤の客へたまふは、おもはしからぬ心得にやあらむ。

總して我をたつるは固より惡み嫌ふ事なり。ことにかの風流の地は、いかにもきよらに滯らず泥まずこそあるべけれ。はじめいふ如く今の風流は只人の物數寄にならひて、誠の風流しれるものは少なかるべし。茶は隱遁の士の翫びよりして小室をかまへて事そげたるをなすが、今の小室は疎なるやうにて華に雅なるやうにして奢也。造費もまた貴き殿作りよりも猶甚し。たゞ〳〵今の茶は居處と器と膳菜の三つに過ぎず。いづかたへ茶にゆきたりといへば、道具はいかに會せきはいかにと問ふにすぎず。いかにしてかくはなり下りけんとあやしくこそあれ。井戸なりとゝやなりとて祕藏せし人へ、何方の所衆に秀でてよく侍るや委しくさしをしへ示されよといへば、實は持ぬしも知らず、何がしの箱書附あるをのみ力とするなり。井戸とゝやなどの類ひは、今の諸侯の家に二つ三つなきはあらじ、これらは數の定りたるものにて、かく數多くあるべきものならねど、たがひに我方のは眞なりとおもひて祕藏するは、たゞ名にのみよりて實のところは知らざるにやあらんかし。予少しく和歌をこのめど、世以て賞する所の人麿のほの〴〵といへる歌などは、いかほど深くかうがへても千古の秀逸たる味はさらに知らず。かの王羲之の蘭亭帖などもその如くにて、生涯の秀逸古今つぐものなしとはさら〳〵思はれず。よりてかうがへぬるにこの歌この書の秀逸は類なきものにて論定りたる物さへも、我輩の如きは知り得ねば、實に其味ひ知る人は、今の世には多くはあらじと、わがくらさもて思ひやるなり。かの名器も其如く、名器たる所は知らで、只人のさいふによりて歡べる類ひ少なからで、唯人の耳目を耳目として特操見識てふ物はなしとやいふべき。人此說をきゝて人麿の歌羲之の書をそしりぬるは如何といふ、いかでそしるべき。よき所だに知らざれば、猶あしき處をしるべき樣なし、可否を知らざるはわがくらきなり、我くらきをもていかで先哲の論定りたる事を蔑如すべき。ゆゑに井戸といへば井戸なり、名器といへば名器なりとは思へど、眞に

其妙處を知らざれば心に面白しとは露も思はず。面白しと思はざればまた好むべきやうもなし。宗易宗旦其外の茶人の名たゝるものゝ作れる物にてもあれ、所持の物にてもあれ、珍らしくよく傳はりしといふまでにて、さのみ慕はしくたふとくは覺えずなん。これらの茶人の言行など拔群の事ありとか、又は世に功たてしとかいはゞ、いかにもたふとくも慕はしくも思ふべけれど、此數寄の道に名ありしとて何も貴ぶほどの事にはあらず。只面白き人なりけりと思ふまでなれば、そのほどに思ひて打すぐるのみなり。されば夫々の器とてもあながちに捨べきにあらず、又あながちに求め傳へんとは露も思はず、賢者の持たりときかばいと慕はしくもたふとくもありなむ。夫れとても其言行こそあれ、手澤存する器は貴く慕はしき計りにて、强て求め得んとは思はず、まして茶人をや。かくはいへど衆に背きて人の尊むものを態といやしみ、名物の茶入を唾壺とし、水さしを便器になすなどは、世に逆ひ人を驚かすの業にして、いとねぢけたる心也。たゞ名物をば名物として、昔よりあらばあるに隨はん、なくばなきにしたがはん。豐臣氏などの頃、高料の賈を定めしは英雄の心にして、是らは今の人の知る所にあらず、たとへば軍功戰功あるに、ひとつ〳〵采地を割あたへんやうもなし。金あたへんには豪雄の士いかで悅ばん。ゆゑにかゝる物も其時の用をなしゝにてこそありけめ。或人茶たつる事を歌にといひければ、

ちやらくさく茶たつる茶ならちやつとすちや、茶をはちやにしてちや〳〵と茶をたちや、とかいたり、一時の心やりにしてなさでも有なんものなるに、貴き事の樣にいひなすこそ笑ふべけれ。また茶の心をといへば、

世の中は木の間の月に遲櫻山ほとゝぎすひとこゑのそら

となんかきて送りぬ。すべて此心得あるべき事にこそ。たゞ人の歡を盡さず人の忠を盡さず、以て交りをまつたうずといへり。何事もこちたからぬこそ。交りの淡き水に比すべし。こちたきはあまき菓子に砂糖つけて喰ふ如くにして、是をかの小人の交りはあま酒の如しとはいふなり。

茶室へいりても、さわがしきはいふもさらなり。又かたくなにあらたまりたるもいとあしゝ。今の人の様をきくに、風流の心すくなきものは飽まで物喰ひ、あくまで酒のみさわがしくし、中立して氣晴らしてんと思ふさまなるもあり。放飯流啜して、かの茶たつる頃は眠催すも有となん。酒も程をすごさず、和して流れ侍らざらんほどを失ふべからず。是を主客のほど得しとはいふなり。獻立もこき薄きとさま〴〵に心を用ゐ、とにかく腹の和し侍る事を詮にすべし。求め得たる初ものとて、時節いと違ひたるは面白からず。茶の食膳は茶にそへしものと心得べし。つねの書院などにて出すは食膳がもとにて、そへて茶を出す、これその分別なり。後座とて茶はてゝ後、酒など又出すは、もとより心に任すべし。後座なきを堅固なる茶などといへど、思ふどち酒のむも餅くふもつねにする事にて、茶の日なればとて茶はてゝ後、早く追返さんも面白き事にはあらじ。後座の酒とても其ほど〳〵を失なはずば、などて又禁ずべき。

あるじはたゞ客の心を轉じ客の心を慰めんとする外はなし。茶杓もて茶碗のふちをうつも、數も調子も同じからざれ。袋より出したる茶入はかろくふきてかざるべし。道具所望の時は久しく出しおける茶入ならば重くふくべし。道具所望するも臺子よりして天目唐物たてなんど、さま〴〵たがふは初心の時の心定めなり。これらも其ほどに隨ふべし。

懸物かけぬるも、書畫ともによく心を用ゐるべし。茶會はたゞ無盡の意あるべきなり。いかで一定すべき。紅葉の盛んなるころ花を多くいけて、後の床には花も紅葉もなかりけりといふ歌かけたるは、斯る紅葉も客をもてなすには猶もたらずとて花も多くいけてなほ客を思ふのあまり、花も紅葉もなかりけりといふ歌かけたるもをかし。また紅葉の盛んなるに花はおよばじとて花もいけず、紅葉には香のなきこそうらみなればとて、香爐出さんもをかし。かやうにさま〴〵の心遣ひ、主客合體したるこそ目出たけれ。茶は臺子よりしてそのかろく事そぎたるを能く心得べし。

庭へ水うつも晝の客は朝うつなといひ置たる心得、尤も冬夏の時にもよるべし。路

次の掃除も自から落散たる木の葉などは、何にたとへん様もなく面白きを、松葉なども箸もてならべ、さて一つ木の葉ものこさじとはき清むるも拙し。こゝの蜘のゐはとれ、そこの蜘のゐはとるな、茶は物をつくすべきものかと、宗易のいひたるいとをかし。實に宗易などは抜群のものにはありけらし。

茶杓はかろければおもくとり、釜はおもければ輕く持つべきなどすべて思ひやるべし。水指のふたぬりたるには塵見ゆれば拭ひ、白木のふたをば拭はず。こは見えずとてちりはあるべし。白木もぬぐひてこそといふ人ありければ、君子は庖厨に遠ざかるの心を知らずやとこたへき。

茶に五思といふ事あり。

一には、太平の澤を思ふ。今日茶たてゝ樂しむも太平の餘澤なり。いかで是を思はざるべき。

二には、君恩を思ふ。此室此道具を得侍るは皆君の賜也。いかで是を思はざるべき。

三には、分限を思ふ。わが其程々を知るにあり。我程を知りてたのしむを眞のたのしみといふ。

四には、諸侯ならば、封内臣民の流離艱難を思ひ、臣民は四隣親戚朋友の休戚を思ふべし。我豐かなり我富めりとて、いかでおごり奢るべき。

五には、我職分を思ふ。貴賤それ〴〵の公務あり。農は農事をなすが公務なり。商は商買の事をなすが公務なり。わが公務をかきてはなどて樂しき事やあらん。

此五つの思ひをわすれぬを眞の數寄者といふべし。

俗樂問答

俗樂問答（上）

第一

問

當時の樂は、唐の雅樂に候や、俗樂に候や。

答

唐の雅樂に候。その後世に製有之候へども、今本朝に用ひられ候ところ、悉く雅樂に御座候。

再問

この段不審に御座候。樂の中には林邑その外胡國の樂も有之、伎樂も有之候。唐朝にては雅樂は別段の事に相見え候。已に雅樂には濁律無之やうにも承りおよび候。

本朝にても伎樂師などその師も分り居候やうにも相見え候、案摩の轉りの調にも伎樂たること明かに有之候。然れどもおしくるめ雅樂に入るる義に御座候や。

再答

當今日本にて奏し候樂の中に勿論唐土にての俗樂も交り居候やうに相見え候。然し俗樂も雅聲にて奏し候へば、只今にては皆雅樂と申候ても宜しきやうに候事。

第二

問

樂の大意本意のところは、如何いたし候ものに御座候や。

答

夫子魯の大師にしめさるるところに候。

再問

唐にも朝廷および宴中雅伎等さまざまに有之義に候。御再答の上猶以て御尋申候義も

可レ有レ之候。

再答無レ之

第三

問

新樂古樂の差別は、いかが定められ候ことに候や。

答

古樂は夏殷より陳までの時、以上古と云ひ、新樂は唐より武宗の時まで。新といふ。

再問

右は體源抄に有レ之候通の御答に候。夏殷周の樂漢魏の樂など申すもの、唯今所レ傳の樂にも殘り居候義に御座候や。唐を新樂と申し隋は新古いづれへ附け申來候や。新古兼ね候など申すは一鼓羯鼓の差別を以て申候ことに候や。

再答

太古より陳隋までを古樂と申し、李唐を新樂と申す義、日本の樂は多く李唐の代に傳へ來候こと故、前代製作の樂はすべて古樂と申候。是は日本より唐朝へ樂を學びにまゐり居候時の言葉に御座候。唯今より申候へば李唐の樂も古樂にて御座候。猶委細に論じ候はば聖德太子御存在の御頃は、梁朝へ御通信有レ之趣に候へば、梁朝の樂を新樂と申すべくや。然れども李唐の代に專ら遣唐使なども有レ之諸事まなび習はせられ候義に候へば、その時代の言葉殘り傳り、唐朝の樂を新樂と申し、隋以上を古樂と申候。又夏殷周などの太古の樂も殘り居候やとの御尋ね、勿論殘り傳り居り申すべく候へども、日本にまなび候は多く李唐の時のことに候故、いづれの代の樂も皆唐朝の聲にて奏し候こと故、名ばかりは新古の差別有レ之候へども、只今奏し候時には新古ともに大抵そのふり似候義に御座候。右の通に候へば、隋も唐も前代に候へば、古と申して然るべく候。たとへば刀劍の新刀古身など申すに同じく候事。

第四

問

舞の新譜はいつ頃より出來候義に御座候や。管等はまづ古來の儘に候ところ、舞ばかり一向古譜に相違致候義は、いかゞの譯にて改められ候義に御座候や。尤も後王輪臺青海等新樣の義は、已に新樣に改り候義も相見え候ところ、一躰の舞、古譜に違ひ候ところ、一向に不審に存じ候事。

答

舞管ともに古譜新譜有之候へども、新譜とても古譜勘考古老追々考るにまかせ委しく相成申候。いつ頃と申す義定めがたく候。

再問

舞の義、先頃辻家より來候譜は、古書に有之候譜に案譜加へ候やうなるところも有之、古譜にたがひ候ところも少からぬやうに相見え、聊ばかり引合に、先頃舞御傳有之、耳州などをも引合せ候ところ、只委しく相成候とも見えがたく、新譜の内に爪

立踵踏など申すことは先づ無之、書きぶりのところも相を胸に當相を披くの類、高麗樂の舞譜のやうにて、陸王にキロリなど申す手、古書には見當り申さず候やうに有之、その上舞ひぶりのところも、古書に有之候ところとは相違のやうにも有之候。尤も古書と申候も弘安弘長正應など申候たぐひにて、應永の頃も已に古のふりのことは委しく相傳候やのやうにも相見え、文明の頃團亂旋の舞有之やのやうにも相見え候へば、追々に古のことには遠く相成候ことにも候や。少しも不審の事は無御遠慮申候やうにとのことにつき、彼是引合を見候へば、只委しく相成候と申すやうにも見えがたく候。猶以て御明解承り度候事。

再答

舞新古譜相違の義、その代々にて譜を見候て、舞ひやすく候やうにその代々古老追々相考へ、知れやすく覺えやすきやうに認候てまなび候故、自然に新古譜の相違出來、新譜にて別段に製作いたし候義にては無之、その内時運の變遷に從ひ、少しづつふり

合たがひ、後には餘程相違のことも有之やうに成り來り候義に候事。

御問の條々御尤に奉存候。夫々御答可申上本意に御座候へども當時　禁廷に被行候樂道の義に候へば、條々に於て理非御答難申上候。御賢察可被下候以上。

第五

問

均調のところ當時たがひ候義は無之候や、新樂なども新に製作無之ては被憚候のみに候や。又は作樂の規則當時にては知れかね候にや、渡物などは定めて自在に出來候義にて可有之と存ぜられ候が、いかゞに御座候や。

答

均調當時たがひ候義無之候。新樂製作の義、人臣にて製作無之候。勅詔に候はば製作出來申し候。渡物同樣に御座候。

再問

均調相違無之段被仰下候へども了解難致候、たとへば壹越調と申す中に、賀殿・迦陵頻・安樂鹽・澁河鳥・武德樂のたぐひと、皇帝・團亂旋・春鶯囀・蘭陵王・承和樂・北庭樂・嘉祥樂なんどは、同調のやうには存ぜられず候。沙陀調など申すも此中に有之候へば、また別やうの調とも存ぜられず候やうにて候。尤も壹越調にもかぎり申さず候。同調と申す中相違の義も有之かと存ぜられ候。均調のところとくと了解無之候ては、製樂渡し物の規則も知れかね可申候。尤も此方などにて樂など渡し候存じよりは勿論無之候へども、均調のところは、とくと存じ申さず候ては相成らず候こと故、御尋ね申し候。なほ委しくこのところ承り度事。

再答無之

問

雙調笙の合竹難和義は前々より沙汰有之ことに候。何故と申す義譯合御覺悟の旨御座候や。

答

雙調笙合竹難」和義は古代是を以て賞翫とす。今雙調の樂下の竹を放律に合吹申候。

再問

難」和樂を和し候やうに致候を賞翫いたし候義に候はば、いかにもきこえ候へども、均外の律交り候ては、自ら不和にも可」有」之ことに候。夫を古代賞翫いたし候譯不審に御座候。委しく承り度候。且つ又當時御用ゐ候ところ、下を放律に合せ候と申すまでにては、合竹の律缺け候のみにて可」有」之候。一體に右雙調は難」和譯合有」之ことに御座候や。合竹下簧有無のみのことに御座候や。

再答無」之

第七

問

武昌樂の裝束は、新古とも何を用ゐ來り候義に御座候や。

答

武昌樂の裝束、古代は武昌樂の裝束も有」之候。今用ゐるところ秦王裝束用ゐ申候。

再問

古代の有」之候へども、秦王裝束武昌樂に御用ゐのこととは、さして古きことは相見えず候。武昌樂別樣裝束何を用ゐ候義に候や、承り度候。且つ又武昌樂は我朝にて作り始められ候ものに候や、唐國よりの舞にて御座候や。太平樂と合歡宴は別のものにて候。且つ調も同じからざるやうに有」之候。譯合可」有」之ことに候。御明解承り度事。

再答無」之

第八

問

樂の終り、シトネ拍子と申候は、何故に有」之義に御座候や。

答

樂の終りシトネ拍子は、靜に止るの意シトドメ拍子にて候。

再問

シトドメ拍子の由は承り候。樂の終りの留め何れも靜なる中に、萬歳樂春庭樂武昌樂破など、シトドメ拍子に留め候譯は、いかがのことに候や。御明解承り度候。

遠慮なく何屆も御尋ね申し候へとの義忝き旨に候。均調より樂の姿その外舞管打もの及び裝束等、さま〴〵御尋究申し度ことに候へども、先日の御答はいまだ不了解に候間、御再問のみ被二申入一候。尤も此方何か考へおき候事も有之候へども、御家筋のことと故御正說承り候上、猶又考訂可被致義に御座候。御答餘蘊無之極り候上にても、万一了解いたしがたき節は兼て考へおき候ところを以て、猶又御尋問可被申事。

再答無之

再答につき猶また被二仰遣一候趣

唐の俗樂にても雅聲にて奏し候故雅樂に候旨、只今のところ雅聲とは不被存候義、新古樂の事年經候ものは古といひ、近きを新と申候と申す義、古書にも見あたり申さざる說どもにて候。舞の古に相違候ところは、御書面のとほりと相見え候。その餘均調又は沙陀調等の義、武昌樂の義などは御答無之候。當時　禁廷御用ゐの樂につき、理非仰せられがたきとのことに候へども、何も難非いたし候譯には無之、樂の義何事にても御尋ね申候やうにとのこと故、已前武昌樂何の裝束に候やなど、手近きことどもに候へども、御家筋の正說承り試み被申、その上追々品々御尋究申候含みにて、必竟執心故の義　その御家筋にては、定めて左やうの義は御穿鑿も有之ことと存じ、被二申入一候譯に有之候。服飾のことにても、古製は如此今代は如斯と申し候たぐひ、いかほども穿鑿致し度候義にて、是また敢て難非を申し候と申す譯には無之候。只心得に尋究いたし候筋のことに候。唯その道執心に候へば、家筋に候ても或はその他に尋ね朝にもとめ野に求め候て、厚くその道を極め候は當道の事にて可有之や、去年の書付にも被二申入一候如く、此方にても何かと承り傳へ候說ども候へども、御答さへ

殘らず無ゝ之上は、右等申入れられず候事。

此後樂家よりの答なかりき。

○

俗樂問答（中）

今度安部信濃守下向に付、前條御問ひ、並に御再問の條々御尋ねあり、信濃守御答申上候趣、（信濃守は京部の樂人なり、京都奈良天王寺等の樂人中、尤も此道の古實に通じたる人の由、先年京樂人多く下り候節も、音樂のことに於てはこの人に讓るほどなり。）

第一

當時本邦傳來の樂、出所さま〴〵有ゝ之候趣に承り傳へ申候。漢王より傳來の曲、本朝にて雅樂寮に習ひ用ゐ候ことかに奉ゝ存候。

第二

古代漢土の樂、その品さま〴〵有ゝ之候由に候へども、當時樂の大意と心得候は、衆人の心相和し、樂音之を聽くに都鄙安泰の意おのづから耳に滿ち候。是れ樂の大意と乍ゝ恐承知仕り罷在候。

第三

古代時世を以て新古の差別も相見え候へども、必竟新古の樂詞につきて差別有ゝ之候て、新古の作樣習ひ有ゝ之候事に奉ゝ存候。本朝に於て作り申候樂にも、新古の振り御座候、然れば新古の詞の振を以て申傳へ候ことかに奉ゝ存候。

第四

舞の義は私氏傳來仕らず候義、尤も本朝に於ての義は、少々承り傳へ候義も有ゝ之かに候へども、此並に相認候ことは御斷り申上度、尙御尋ねを蒙り候御樣子に付て、承り傳へ候義は乍ゝ恐申上度も奉ゝ存候事。

第五

均調の義、異朝の趣とは本朝傳來は少々違ひ候義も有之候やうの覺悟仕候。樂新製の義は數百年、本朝に新製の義無之、總て作樂の意先づは知れがたく候義理も有之候。なか〳〵傳來樂奏古人に及びがたく、その器量にて新製の義はなか〳〵不存寄義と奉存候。誠に絶妙の所作、萬人耳を傾け候器量に御座なく候ては爲しがたかるべき事か。然れば當時新作と申候義は、その人體無之事に奉存候。渡物の義は依仰相渡候義等は、器量の輩は可仕候ことも有之べく、併し是れ以てその器量容易ならざる義に奉存候。

第六

他管の義に候へども、笙の合竹の依詞下の簧を放し、或は押候義有之候やうに承り傳へ申候。いづれにも相和候爲に候へば、その詞に應じ候義に承り傳へ申候。

第七

武昌樂に當時秦王の姿に舞ひ候へども、以前は當時に稱する平舞裝束を着仕り、帶劍鉾着具へ舞ひ候やうに承り傳へ候。

第八

シトネ拍子と申候は、萬歲樂・散手破半帖、武昌樂の體物終りの太鼓あて候て樂詞殘り候故、今太鼓一打加へ候說を以て、シトネ拍子と唱來候趣覺悟仕候事。

右の趣不堪ながら先づ所存の趣申上候。文盲の義、漢士の書籍などは、幼年より只所作の稽古のみに相勤、誠に不才の義、一向解了の義など及びがたき身分に御座候。本朝に於ての故實は、隨分心掛候心底に候へども、是以てなか〳〵及びがたき義に御座候。右不顧恐ほゞ相認め候義、何分定めて不合期の至り、御斷り奉申上候。惡筆眼氣旁、旅中麁書乍恐可然、宜しく御沙汰御斷のこと奉願候。

○

俗樂問答（下）

我家にて用ゐる所の説を以て、伶人家の答の非を解く。

第一

唐の樂を我が朝にては悉く雅樂となすてふ答こそいかゞなれ。樂はさまゞ〳〵あるが中に、いとも尊きは雅樂部なり。こは天子よりして大夫士までの雅樂ありて、天子の群臣を宴するにも、郊天祭祀なんどに、それ〴〵の由ありて、八佾の舞よりして、雍熙鹿鳴太和冲和なんど、さまゞ〳〵侍るなり。もとより俗樂に用ゐるとは、器も又ことにして、俗樂のごとく濁律用ゐることは侍らず。そのいともたふとき雅樂の、わが朝へ傳はらざるをかうがへ侍るに、かの遣唐使の輩とても、かの國より見れば夷國の使なるに、いかで天子の雅樂を敎へものすべき。諸侯以下の雅樂は、よしまた傳へ侍る

とも日出る處の天子とまでも書きなし、遣唐使なんどしも云ひ習はしたるひらけしむかし人、いかで唐の諸侯以下の樂を習ひ得てわが朝天子の雅樂となすべき。故に雅樂は習ひ得ず俗樂部を習ひ得たるこそ、いとむべに尊けれ。俗樂は內敎坊なんどの樂にして朝廷宗廟に用ゐるにはあらず。故にわが朝にても御遊に用ゐられ侍るぞ、ひらけし御代のためしありがたき事になん。さらばわが朝には雅樂なしと思ふ人もあるべきが、いかで雅樂なかるべき。かの神樂東遊のたぐひは、わが朝の雅樂なり。故に天子の用ゐたまふ樂にして、もとより常人などへ敎へつたふることをせず。器とても和琴長笛なんどにて、篳篥は胡國の器物なり。和琴、長笛拍子のみにてもとはありけらし。已に荒廊などにも篳篥用ゐしことには見え侍らねども、らうの家々などには荒廊などにも篳篥を入れられしにはあらずや。猶逐ふてかんがへ侍るべし。うたひもの又は裝束とても、いさゝか彼國にはよらで別にわが國のとて作られけるぞ、いといたう尊き事になむありける。さるにいまの人は俗樂を雅樂と思ひて、別にかゝる尊き樂あるを

ば、たゞ神樂とのみ心得て、雅樂とは知らざるこそなげかしけれ。それよりして東遊などを、いやしき高麗樂とつがひて侍るなど、むかしたえてなきことゝこそ聞き侍りぬれ。酒に醉ひし姿まねびたる胡飲酒、親を虎にとられしうれひにいでたる撥頭なんど、いかで雅樂といふべき、その俗樂を以てわが朝の雅樂と心得るは愧づべきことにして、わが國體を損ずるなり。龜茲林邑なんどいふ秦の樂を、わが朝天子の樂となし侍るはあまりに勿體なきわざなり。尤も律をきゝても雅樂のたがふことはいちじるしく、樂符雜錄なんどにもその戲作の所爲しるしゝもありて、たは俗樂のことよくしりたればこそ、當座の作爲にさま〴〵のことしたり。太平合歡の二曲を合せて、時にとりての奉獻に府裝束を作りものし、又はあまに二の舞ひまひいだし、河南浦にたてすり作りごとし、撥頭を八人におほせて舞はしめ給ひけるとなむ。俗樂は御遊のものなれば、常度にかゝはるにもあらず、さるに俗樂を雅樂と心得るよりして、さま〴〵の祕傳祕說をかまへ、つひに祕する餘りに本義をたやして、尊きことに强ひてしなした

る心ひくさ、いはむかたなし。雅樂寮に附屬するものも、雅樂とおしまかせて云ふべきか。その餘例の佛說とりまじへ、奇怪の事を古實として、あるは大曲なんどを名をつけ、こと〴〵に祕して樂の本意を失ふ尤も以て憎むべし。（陵王の新義なども祕するのよしにかくはなしけり、つひに新樣のみとなりてけり。）

第二　樂の大意

樂の大意は今あらたにいふべきにも及ばず侍るなり。初めにもいふ、今の樂は俗樂にて侍れば、尊ぶべきことなれば、俗調とても今の俗調にたぐひすべきにあらず。實に人心を和し善心をおこし侍る功少からず。然るにその樂の本意にくらく侍れば、樂てふものはうちあがりし人の好むものにて、俗輩はきらふものと心得る輩多く侍るぞなげかしき。さなむいふ心から尊くしなさんとして、節奏なくたゞに引きのばし吹きなし、かゝ大鼓まひまでも拍子にあふを野とし、箏なんども左手用ゐるにてこそ合ふめれ。今はそれもはぶきて、いかにもおもしろからぬを高古と心得、俗輩は只眠を生

じ侍るうつはものとして閑逸の人の(技と)なす。このやうになしたるは、高くせむとして却て樂の本意を失ひ、無用のものとはなしにけり。皆くだりたる世、管絃音樂をもつぱらとせしよりの費なりけり。かの俗樂のことなれば、民間市井にても日まち月まちにも打ちより樂奏すべきことにて、已に古は神官社人あるほどの社には、樂器皆そなはりて舞ひかなでしより、鼓舞善心を興起して邪辟の心を遠くるの本意なれば、今のごとく雲上の器とのみなりて、伶人らがものゝやうになりしも衰へたるしるしにて、無益のものとやいはまし。さて又今の人、古の事といへば、いとぬるけて味ひうすく、おもしろからぬを古のふりと思ふものあり。何より出でしことにや。かの太古穴居の時なんどをさしていひけるにや。古へ文化ひらけたるは今の世のたぐひにはあらず。物のたくみに至るまで精密をこめたる今のたくみの及ぶべきにはあらず。晋唐の書法のくはしきを宋後に至りて法をやぶりて粗になししたぐひ、織物なんども今の織師のくはだて及びがたきことをなしおきけり。又も何しらぬものが佛像など見て刀

痕のまゝにてあらくけづりなしたるは、いと高古のものなりなどいふ。かの鳥繪師などのつくりたるは、あくまでも一生の力を一佛にこめきざみても、その肉のところには土をもちてぬりつけ、上へ布きせてかため、箔おきたるもまゝあることなり。その心がら物事にみな生涯の力をこめてなくしにぞ感應ふしぎもありけり。樂もよくものゝ拍子にもあひて、何しらぬものもおもしろくおぼゆるやうに舞ひなせば、今時の人見ては俗氣の繁手のといふ。俗樂なれば、もとより繁手なるべきものにて、今の横笛などの手の細やかなるは、むかしよりの事にて侍れば、何とも人々こゝろづかず侍れども、これらはいとも繁手なる物にて、古の俗樂のつたへしものなれば、うち物舞ひなどぬるけて、拍子に合ひ侍らざるやうにとなすは、かの古の事知らで、太古穴居の頃を古とさすたぐひの心より出でしなるべし。下りたる世なれど、安元の頃樂のわく屋の桂を螺鈿にして、わく屋の上へ白がねの鶴を作りおき、舞ひの裝束にも玉をつゞりしことなど昔ありしが、彼の古といへば太古の質朴をさしていふ人はおどろきぬべ

し。かへすがへすも今やうになしては樂の本意にもあらず。花月風流のなかだち、閑逸の所作となれば、もと無用のものとなりて貴むべきものにあらず。

第三　新樂

新古樂は昔よりいひ傳ふるまゝをもてこそよぶべけれ。ふるきは皆古樂といふてふ說、いと據り所もなきことなり。すべて新樂といふは、鞨鼓を用ゐる、古樂は一鼓を用ゐる、隋の樂とても鞨鼓用ゐるは古樂を新樂やうになすなり。玄宗の頃の樂にしても一鼓用ゐるは新樂を古樂やうになすなり。是はさして論說あることにはあらず。

第四　舞

舞新譜てふものは只よきほどに作りなし、古譜のわかりがたきものは舞ひかへてそれを新譜となしゝなり。思ふに、高麗樂はかの應仁の亂後舞樂たえし後も、よくおぼえたるもの殘りけむ。舞樂は高麗によりて復せしところゞ多き。高麗は古のふりにて鼓の拍子もて舞ひ侍れば、おのづからよく舞ひも合ひてかつ古を失せず。唐のかたはそのこと絶えにければ、笛のしやうかもて舞ふにぞそろひ侍らず。打物なんども今やうに打つはたゞ家々の譜などゝ我まゝにいへど、古の書にあなるとは多くたがへり。ことに鞨鼓によりて樂の遲速自由になすべきものなれば、第一の宿老のなすことに定めたり。今は鞨鼓いかにうてども節奏なければ、遲速はたゞ答の上にのみありて、宿老のなすべき名のみにして實は絶えて無し。せむ方なくてや、かき下たき上などいふ約束を定めて遲速なし侍るなど抱腹に絶えたることなり。舞管の遲速たゞ鞨鼓の上にのみ侍るを、今やうの樂する人は知らず。

第五　律の事

律のことくらくていかで新樂製作渡物等も出來べき。今は壹越調の中に、いつか別の調入りし樂あるをも知らず。さた調といへど別の調にあらぬを、別のことゝ心得るなんどいとものおろかなり。先づその大略をいはむに、黃鐘均の聲聞を盤涉調といふ、採桑・秋風樂の如き是なり。同均の宮聲を正宮調といふ、蘇合香・安樂曲の如き是なり。

同均の角聲を大石角調といふ、劍氣褌脱の如き是なり。仲呂均の羽聲を正平調といふ、三臺鹽・萬歳樂の如き是なり。同均の商聲を小石調といふ、泛龍舟・感成樂の如き是なり。言射均の商聲を越調といふ、皇帝・團亂旋・蘭陵王の如き是なり。同均の角聲を越角調といふ、赤白・桃李花の如き是なり。同均の羽聲を黄鐘調といふ、喜春樂・史宮樂の如き是なり。さるに今は蘇香を強ひて盤涉調と云ひ、賀殿・安樂曲・澁河鳥・武德樂のたぐひも、皇帝・團亂旋・承和・北庭樂の如きをもおしくるめて壹越調とす。何のいはれをも知らず、つひに賀殿の破に、異均のものを用ゐるのたぐひに至り、秦王は乞食調とかいふ、何のわけを知らず。萬歳樂もとは大食調なりしを平調にわたしたるなり。第六の拍子の後、笙篳賓を吹くところは、わた落したるにて仲呂にかへてこそ平調とはいふべけれといふ。この均調にうとくして、いかで樂のことをいふべきと物しれる人はいふとぞ聞えし。

第六　雙調

雙調不和のこと、下の一音にかゝはることよもあらず、初にも記したる夾鐘均七調夾鐘林鐘南呂無射黄鐘は、簇右の七律を以て曲をなすことなるが、今の笙は十七簧にて夾鐘なし。よりて姑洗をかりに用ゐる。姑洗をかりに用ゐるによりて、無射を除きて應鐘を以て強ひて會す。樂家錄にもことぐ〳〵しく、雙調不調下簧を止むることをいへど、さばかりのことにあらず。かの陳暘が樂書に笙十七簧舊外設二管不定置謂之義管、毎事均易調則更用之とありて、卜計の二簧ありて均調によりてたてかへ用ゐしなり。（卜則東鐘）只下を放律に合するなども淺々しきことなり。和しがたき故に尊む、猶以いかゞなり。とにかく右やうの說を以て貴しとする風なり、いと笑ふべし。

第七

秦王破陣樂の舞の絶えしも久しきことにはあらぬを、伶人の宿老に秦王破陣の裝束をたづねしに知らずといふ。よりて甲冑弓袋などのことをいへば、それは太平樂は裝束なりと答へぬ。もと太平樂は五方獅子の曲なり。平樂を破とし、合歡宴を急として、

府裝樂（武昌樂とも云ふ）といふ樂を作りたれば、おしまかせて太平樂とはいかでいふべき。さるに合歡宴のことをば太平樂の急などゝいふ伶人ありけり。この府裝樂に秦王破陣樂の裝束俄に用ゐさせられしことは已に體源抄なんどの手近きものにもあなるを、今はおしまかせて太平樂の裝束とまでもおぼえてけり。府裝樂に四十人甲をきるてふことは掛甲のことなるを、あやまりて秦王の裝束用ゐしことゝやなりにけむ。

第八

シトネ拍子のこと、靜にとむるとのみもいひがたかるべし。樂の詞により舞の手にもよることなり。

もと樂のことは古より傳りけれども、いつか物飾もみだれ、中比に至りては管絃風流もつぱらとなりてより、樂の本意はたがへりけり。さるに田安中納言の君、いとけなき御時より樂を好みたまひて、初めは今やうの舞樂とり行ひ給ひけるが、やゝその謬りをさとり給ひてけり。しかるに德廟にもその御志をとげしめ給はむとの御事にや、古き樂の書籍家々の祕錄、この樂に用あるは皆田安府へ下したまはりけるにて、つひに復古の御考ありてけり。それよりして三十年ばかりも、つひに樂のことは捨て給はず、ゆかゝへ給ふ頃までも、この樂の御考のみはありて、皆御口占みしたまひて、侍臣に書かしめたまひけり。余その御志をつぎ侍るにも、學いと狹く侍れば、御考をたすくべきやうもなし。たゞわが家にのこしおきて、人のひらくるを待ち侍るなり。然るに何知らぬものは、都の伶人などいへば、ふるき事も今の事もよく通達し侍ることゝのみ、思ひあやまるさまに聞えたり。よりて七八ヶ條まことたやすき條を設けて、天王寺の樂人の宿老へやりて、よく考へて答へ侍れといひやりたるが、數月して答におよぶ。ことしまた阿部氏來りたるがこの人は好古の癖ありて、奈良京天王寺の伶人の中にての事知りなりと誰々も云ふ、よりて又たづねしにその答初に出すが如し。猶又宿老の中にも事知りたる人々、答へよといひやれども、今に答ふるものなし。笛竹ふくことなんどのみくるしみて、かゝることは露知らぬ輩おほく侍るとぞ。去年みや

この伶人おほく下りたるを招きていさゝかの事とひこゝろみたりしに、いとうとかりけり。よりて後には問はず侍りき。かくなし侍るも、かの家々の人をそしるにもあらず、かちまけきそふにもあらず、たゞあやまりを人々知りて復古の道ひらけなば、中納言の君の御説あふぐものも、あるべからむかと思ふのみにてぞありける。

後素漫筆

言葉もて云ひ傳ふるも筆して傳ふるも程こそはありけれ。赤きは赤きといひ、白きは白きとは書きも傳ふれど、斯ゝる色をあかしといひとあるを白しとなむ云ふ事は言葉にも筆にも及びぬるものにはあらず。されば畫てふものありてこそ文筆のかけたるをも補ひて、共に後徵のものとこそいふべけれ。譬へて云はむに、年中行事の繪ありてこそ宮殿服章器財なんど章々として明かなるをもて見るべし。言葉を盡していひ筆をふるひて書いたるとて、見ざるものゝ見るやうにあらん事は難かるべし。いづくの國にも畫てふものはありながら、我國の畫こそいと貴けれ。唐國の畫も古き代にはその眞を寫しけれども、多く風俗の玩びとなりて、あるは禽獸草木、あるは山水のけしき畫きたるぞ多き。されど今殘りたる十八學士なんどの畫あればこそ初唐の服章も窺はるべけれ。その後よりしては、かの陽秋の何のといふに畫きたる如く、代々の考もなく、唯僞をかき遺す事とは成りにけり。我國の繪はもはらその眞をうつす事なれば、皆考への據りところとなりて文筆にもつゞきぬる貴きわざにてぞありける。

古は既に畫工司を設けて畫師畫部等あまた置れたるも皆政の爲とぞ、その用軍防令に見えし。さるをその畫に妙へなるもの牧溪なんどの書きぶり學びてや、雲煙のやうに墨うち流して淡きは遠き山なむどと見え、濃きは森林のやうに見えて自らの景色そなふるやうになせしを一奇觀とせしなり。これも惡しきにはあらざれども、皆その風情になりもて行きて、終に畫てふものは翫びのわざとぞなりにける。天造の妙なるを筆に盡しぬるを、いと高き事と心得てつひにその高きがいつか翫びの技となりし。低き事を知らざるこそ慨しけれ。それより繪のことをばそらごとなんどといふ事にさへなり下りたる。然はあれど古き畫の今に遺りてその德尙明かなるをもて、近き頃はまた貴む人もあまた出來ぬ。これ偏に文化ひらけしおほん惠の淺からざる事、仰にあまる事になむ。猶畫は書と源を同じふして、今の古に及ばざる事、かの張彥遠が詞にも委しく見えぬる。かくまで貴き繪の幸に今の世まで傳る事なれば、その繪の卷々抄寫

して門類を分ち置きたらむには、好古の人の考のたよりにも成なんものをと年頃心にかけて、かしこに求め、こゝに乞ひて書き集るにぞ、終にあまたの卷とはなりぬ。名づけても古畫類聚といふ。これをこの序になんどいはむもおこなれど、今この御代のありかたさを仰ぎ、かつは古き畫の貴き事いひなむとて拙き筆のまに〳〵聊か書いつけぬる事になむ有りける。

寛政七つのとし葉月三日

浮世繪

今畫といふものは浮世繪なりといふは激論なり。されど唐の十八學士の圖を見てその頃の服をも知るぞかし。かの春日石山の緣起、年中行事の畫ありて、その頃々の衣服宮室武器その餘の調度の製をも知るべし。然るに畫は玩弄のものとなり下りしより、芳野のけしき畫くもその眞の山水にはよらずして、瀧なき所へ瀧を落し、松なき山に松を書いて、只彷彿たる影をゑがくが如し。又今の世のけしきゑがき、隅田川の遊舫を浮め、梅屋敷の春の景色など畫くは浮世繪の賤しき流の畫く所にして、掛物なんどにも唯大體をのみ畫くなり。かゝる風俗の好尙によりては、今の姿は後の世何を以て知るべき。山水とてもすでに眞の事にはあらず、浪に兎をゑがき、牡丹に獅子を畫くなどたとひ筆力不凡彩色目を驚すとも、一時の玩弄にして畫の畫たる本意はうすかりけり。それよりして唯一點の墨を散したるを眞の山水の景色なりとていと高き事とは心得るなり。されば この浮世繪のみぞ今の風躰を後の世にも殘し、眞の山水をも後の證とはなすべし。蠻畫などは寫眞鏡にうつしてそのまゝをゑがければこそ横文字知らざるものも、その畫によりてその制度をも察すべけれ。今唐畫といふものありて、かと沈南蘋の寫生などをよき事と心得て山水人物の沙汰にも及ばず、只かの國の事のみかきて富士の山書くこともせず、櫻花かくこともせざる拙き畫は玩弄のまた次なるものといふべからん。

繪卷物

後三年の畫卷物は鳥取侯の家にあるをもとゝす。さるにその首卷はかねて缺たりけれど、外に眞物もなければ缺けぬといふものもなし。寛政葵丑ある方より後三年畫卷物初卷一つ取出したり。彼の侯にあるとひとつものなり。これによりて人々驚く。

當麻の曼陀羅緣起

當麻の曼陀羅緣起は鎌倉光明寺にあり。この畫の末に古土佐の筆なりと狩野永眞がかいたる跋ありと沙汰したるにさにはあらず。この曼陀羅緣起は住吉慶恩が筆なり。筆力顯然として疑ふべからず。まいて住吉家の古記に慶恩が曼陀羅緣起をゑがきしことしるしあるをや。云々

藍　ら　う

繪なんどに用ゆる藍らうを製するには紺の木綿三尺くらゐを鍋に入れ、灰汁を入れてよく煮侍れば泡立つなり。その泡をすくひあげて器物に入れて後に、上の水をしたみ、底にある藍を干して固め侍ればよき藍となるなり。尤灰汁を度々水干して去るべし。その布は白き布となる。

沈南蘋の胡粉

かの南蘋なんど畫にいとくはしき胡粉にて書くが、我國にて眞似するに及ばず。長崎の熊非とかいふが南蘋に習てもその胡粉の製は云はざりけり。後に南蘋唐山へ歸る時、其胡粉を送りたりけり。熊非よく見しが唐の土なり。故にまた唐商に云て唐の土と見えぬ。製し方はいかゞなすぞと尋ねしかば、また來る年その唐商來りて南蘋に問たるがよくぞ唐の土とみしなり。その上は傳授すべしと云こしたりとぞ。その製を聞くに唐の土と豆腐を入れ水を和して陶器にてよく煮るなり。さてその豆腐を擧ぐれば唐の土の灰汁皆出て黑くなるなり。殘りたる唐の土をよく磨ればいと細にしてうるはしく、いかなる細畫にてもなすべきなり。南蘋が黑き蝶を畫くに手などにつけなばつくべきと見ゆるやうなる黑色あり。此傳は象牙を燒きて粉にしてその畫の上につくるなりとぞ。この二つをばことに祕すとなり。

油繪の油

油繪の油は荏の油一升に郡錄五錢目入れて半ほどに煎じ用ゆるなり。外に唐辛なんど入れたるは却つて惡しゝ。

祕籍大名文庫刊行の辭

近時古典研究熱の昂まるにつれ、古書覆刻の要求が益々盛んになり、巷間、この種類書の刊行さるゝものが決して尠くはないが、本文庫の如く、寫本の世に一部或は數部しか存するものなく、然も、今日筆寫さへ容易にあらざる稀覯本を主としたる覆刻の如きは、未だ行はるゝに至らず、識者をして失望せしめること多大であつたが、弊閣こゝに稽ふるところあり、古書の藏書家として學者間に於て垂涎の的となり、又古典知識の第一人者として一代の碩學たる福井久藏博士に諮り、今漸く「祕籍大名文庫」の刊行を見るに至つた。

刊行書目は、寫本として數十金を投じてもなほ今日購ひ得ざる珍本を主とし、百金を以てしても手にし得ざる板本を混へ、中に、その道の學者にすら、未だその存在を知られざる絶品さへ幾多收藏されてゐることは、本文庫の嚆に誇とするところであり、また、種目は凡る部門に亙り、單に古書の蒐集といふ一點のみよりこれを見るも、絶版の曉には、幾倍或は幾十倍の市價を呼ぶものゝ多數含まれてゐることは、本文庫の持つ本としての特異性であると信ずる。

宛も本文庫は、博士が畢生の大著たる弊閣版「諸大名の學術と文藝の研究」中に擧げられつゝも、然も世人の眼に觸れたることなき珍籍の覆刻であり、該書と文庫と兩々相俟つて、こゝに絢爛たる德川文化の全貌は識者の前に初めて今日明かにされるであらう。

大方の御支持を期待して已まない次第である。

厚生閣主

秘籍大名文庫

第一期刊行豫定書目

國體本義諸篇	戸澤土佐守正令著	皇朝魂辨、大日本號之說、その他日本精神昂揚の興味ある未刊典籍
治教秘錄	黑田豐前守直邦著	治教略論、家僕教訓、等身を幕臣より起し大名に列した直邦經世談
兵法家傳書 殺人刀 活人劍	柳生但馬守宗矩著	將軍家指南柳生侯の傳書で特得の兵書、劍禪一味を說き又修養の糧
大東婦女貞烈記	松平鸞岳公子著	我邦上代よりの貞烈なる婦女四十有二を傳し、話柄各種、興趣不盡
藝苑漫筆 五種	松平樂翁公著	建築に關する蒐裘小錄、其他茶から庭園、雅樂、繪畫に至る隨筆集
蝦夷島奇觀補註	松前志摩守德廣著	幕末露艦來航に際し松前侯の編した北海風俗慣習動植物歌曲圖入本
松秀園書談	增山河內守正賢著	六書八體より隸眞八分行草飛白の諸體、著名法帖論評等、用筆圖入
本草啓蒙補遺	黑田樂善侯著	和漢洋の文籍と觀察實驗に鑑み蘭山の本草啓蒙補正を企てた稀覯本
菊經	松平大學頭賴寬著	栽倍に關する事其他、器具から害蟲迄圖入で說明した養菊家垂涎書
鷹山公婦女庭訓	上杉彈正大弼治憲著	仁君の鑑と謳はれた鷹山公が六人の孫女に與へた婦德婦言婦容教訓
服飾漫語	田安中納言宗武著	我邦中世に於ける服裝を說いた有職學の文獻で、貞丈の加註本覆刻
歌學論叢	前田龍澤侯著	今年今月今日の調を高唱し、易の理に和歌を會通せしめた獨創歌論
歷朝詩纂	松平大學頭賴寬撰	論語徵集覽の著者で今百卷の前篇を覆刻、二百四十四家の作を蒐む
名侯歌文集	保科正之堀田正俊其他	名君として知られる政宗、正之から光圀、正俊、光隆の珍籍五種選
蘇明山莊句集	柳澤米翁侯著	米仲に就く事十七年、斯壇の宗匠を以て自他許した米翁公秘籍句集
鳥名便覽	島津薩摩守重豪著	鳥名四百十五種、一々和漢名方言並に變名を錄した一書、鳥界珍寶
古今錢貨譜	朽木近江守正綱著	古文錢震且錢より日本高麗宗南等に及び鑄錢法鑑定法迄圖入權威書
宴遊日記別錄 一名江戸三座觀劇日記	柳澤美濃守信鴻著	米翁公の觀劇日記、回數實に百卅回に上る中村市村森田三座演劇錄
創垂可繼	大關土佐守增業著	社祭式、年中行事、その他水利農產の大家黑羽侯の遺した偉業可見
淺草寺誌	池田冠山侯著	冠山侯の有名な淺草寺誌、文人交遊、世態人情、宛然江戸風俗誌也

以下續刊　各冊定價別　詳細目錄呈

文學博士　福井久藏著（內容見本呈）　帝國學士院研究補助の大著述

諸大名の學術と文藝の研究

菊判背革上製本函入、貴重文獻筆跡別刷口繪附、八百頁函入、定價拾圓、送料卅錢

本書は博士が德川期に於ける學術と文藝の眞相を把握せむがためには、時代の主導勢力たる三百諸侯とこれを圍繞する學者文人の遺作を盡く涉獵するの要あることを夙に認識せられ、本業の完成を企圖せられてより東行西走、よく諸侯の秘庫に參じて貴重なる資料を得、爲に博士によりて新しく存在を千古に揭げ得る名作名研究の發見されたるもの尠しとせず、これらは概ね逐次秘籍大名文庫として刊行を見る筈であるが、その熱意は遂に前人未踏の本研究を大成せしめ、德川期に於ける學術と文藝とはこゝに初めて文化史的に綜合樹立された。名著名作の多くを引用し、貴重寫眞を挿入して記述は平明、現代の史家、文學者、科學者、軍人、歌人、俳人、茶人等を稗益すること多大なるものがある。

內容一班

序論（本書の成立）
第一—諸侯と儒學（藩學の興起）
第二—諸侯と神道
第三—諸侯と佛教
第四—諸侯と國學
第五—諸侯と歷史
第六—諸侯と地誌
第七—政令と教訓（一政治・二教訓）
第八—諸侯と兵學（一兵學一般・二馬・三犬追物等の騎射・諸侯と鷹）
第九—諸侯と科學（一數學・二蘭學・三理化學）
第十—諸侯と文學（一和歌・二連歌・三俳諧・四紀行文學・五國林文學・六諸侯と戲文・七漢文學・八漢詩）
第十一—諸侯と錢貨
第十二—諸侯と藝術（一音樂・二繪畫・三書道・四茶道と諸侯）
第十三—雜（一隨筆・二叢書）
總索引

秘籍大名文庫

昭和十二年十一月十六日印刷
昭和十二年十一月十九日發行

藝苑漫筆五種

定價　一圓二十錢

編輯者　福井久藏
發行者　岡本正一
印刷者　山本禎男
印刷所　株式會社宗文社印刷所

東京市麹町區下六番町四十八番地
東京市牛込區山吹町百九十八番地
東京市牛込區山吹町百九十八番地
東京市麹町區下六番町四十八番地

發行所　圖書出版　厚生閣

電話九段三二一八番
振替口座東京五九六〇〇番

67
532

終